

開拓伝道物語

— 地の果てまで福音を —

大串 眞 著

美竹文庫 No. 4

開拓伝道物語

— 地の果てまで

福音を —



大串 眞 著

美竹文庫 No.4

開拓伝道物語

—地の果てまで
福音を—

大串 眞 著

編集者によるまえがき

この「美竹文庫」第四巻のテーマは、「伝道協力」（教会同士で互いに協力して伝道のプロジェクトを実行すること）です。

わたしたち日本基督教団の諸教会は、伝道者も、教会員も、とかく各個教会主義に陥りやすく、「伝道協力」という問題は後回しにされがちです。しかし、伝道を真剣に考えたときには、どうしても、伝道協力が真剣な問題となってくると考えます。

御子は十字架において贖いの御業を為し遂げられた後、復活され、天に上られました。そして、今も御霊と共に働き、終わりの日に向かって歩みつつ、福音を宣べ伝えて居られます。このキリストは、教会や個々のキリスト者と共にいます。「インマヌエル」（マタイによる福音書一章二三節、二八章二〇節）の主であられるだけではありません。教会やキリスト者よりも一歩先を先立ち行かれ、先に伝道して居られます。そのキリストに従い、教会が主の御業に参与するのが伝道です。ですから、伝道は、教会の自己保存や自己

拡張のためにするものではありません。伝道の根本動機は、ご自身の命を捧げてまで一人を愛された主イエスの贖罪愛にお応えすることです。わたしたちは、そのキリストの御業を継承し、主のみ苦しみにあずかることを恵みとして喜び、伝道するのです。このことをわたしたちの間でもう一度確認するために、「美竹文庫」は発刊されています。

伝道するためには、どうしても、伝道協力が必要です。なぜなら、わたしたちが「わたしに従いなさい」と主から呼びかけられたことは、わたしたちにとっては、自分の教会を建てればそれでよい、ということではありません。自分の教会の建っている地域全域への伝道が委ねられています。それは、本来的に言えば、日本全国への伝道の使命が、個々の教会にも与えられている、ということなのです。もちろん、それはとうてい、一教会では担いきれない大任です。それだからこそ、「全体教会」が意識され、「教団」が形成されるのです。その中で、地方教区の場合には、その県全域、または、教区全体の協力伝道が考えられます。都会の教会の場合でも、それなりの協力体制が組めるはずです。どうしても、教会が教会であるためには、「伝道協力」が必要です。

今回はそれ故、美竹教会文庫委員会では、一致して「伝道協力」という主題を選びました。幸いにも、大串眞先生という、伝道精神に溢れ、非常に豊かな「伝道協力」の体験を

お持ちになっておられる若い伝道者を執筆者として与えられました。先生の最初の赴任地である四国教区は、文字通り、「四国の伝道は四国のみんなだ」という考え方のもとに、幾つかの伝道圏を形成し、財政的な互助制度を実行しております。また、牧師同士、教会同士の祈りをもとにした交わりが伝道協力を支えています（第一章参照）。先生が現在取り組んで居られる千葉県北総伝道所も、お聞きしたところによると、約二〇の教会や個人の献金と祈りによって展開されているプロジェクトです（第二章参照）。これらをご一読いただき、「伝道協力」のヴィジョンをここから得られるならば、幸いです。

なお、この第四巻も、非売品とさせていただきます。これまでどおり、美竹教会にご注文くだされば、送料とも無料でお頒けいたします（ご献金くださる方は、ご参考までに、原価一冊三百円です）。

二〇一〇年一月二日

美竹教会牧師 上田 光正

著者によるまえがき

ご承知の通り、首都圏にある比較的規模の大きな教会は各個教会主義とも言えるほど、一個教会だけでなんでもやってゆけるところです。また、人数的にも、財政的にも恵まれていて、それができていたのだと思います。しかし、昨今、教会の体力が低下していることが指摘されています。かつて教会を支えていた信徒の年齢層が高齢化し、各教会が自分を守っていくのに精一杯と言われています。また今日、日本基督教団の伝道は冷え込んでしまっていることも聞かされています。その中で、かつて日本基督教団が持っていた組織的な伝道協力の手法や伝道の戦略や気運が非常に乏しくなり、内向きな教会形成へと向かって参りました。伝道に向けられるべきエネルギーが内側の内紛とその收拾にばかり奪われた結果、伝道に対する気力、体力、靈力を失ってしまいました。

今後、日本基督教団の伝道はどうなっていくのでしょうか。危機感が募ってくる現状です。そんな中、今再び、組織的な伝道協力について関心が集まってきているのではないのでしょうか。

わたしがこれから証しとして述べようとしていることは、伝道協力という事柄に対する確信を得るきっかけとなった二つの体験についてです。その一つは、四国教区での伝道協力の体験であり、もう一つは、現在体験しつつある、千葉でのそれです。これらはいずれも、伝道の一つのチャレンジであり、実験であります。そして、これらが今後の日本基督教団の伝道を考える場合の何らかのヒントとなるならば、大変幸いに存ずる次第です。

わたし自身、東京にいたときには、他の教会との協力など聞いたことも、考えたこともありませんでしたが、神学校を卒業してすぐ四国教区に遣わされて多くのことを学ぶことができました。そして、現在の千葉支区での体験は、そのことの応用編として役立たせていただいています。もちろん、伝道協力は制度や組織だけの問題ではありません。制度や組織という枠組やプログラムが整っていればできるかという点、必ずしもそうではないと思います。どんなによくできた制度や組織があっても、ただの絵に描いた餅では役に立ちません。そこにいわば「生きたもの」がなければ、制度や組織、すばらしいプログラムも何の役に立ちません。では、この「生きたもの」とは何なのでしょう。

現在、日本のプロテスタント教会は伝道一五〇年の行事を行っています。しかし、他方

において、伝道協力の基盤となる教会相互の「信頼関係」が崩れている中で、教団をあげての伝道協力ができないことがしばしば嘆かれています。それは残念ながらその通りであり、そのことを憂い、嘆く思いはわたしも同じです。しかし、「信頼関係」が全くないわけではなく、それが成り立つ地域や教会群同士があることも事実です。なぜなら、「信頼関係」の基礎は、人間の一致ではなく、信仰の一致ですから、それが存在する地域や教会群は決して存在しないわけではありません。また、何よりも第一に、「信頼関係」とは相違を越えて創りあげてゆくものでもありません。つまり、遣わされた教会が存立する地域に対する「伝道への使命感」が、多少の教会の伝統の違いや考え方の相違を乗り越えて伝道協力を生んで行く、と考えます。その伝道への使命感を生むものは、教会の中の「生きたもの」です。つまり、教会本来の固有な霊的な力とでもいったらいいでしょうか。その教会の底力が発揮されてこそ、伝道協力も為され得ることでありましょう。そしてそれは、つきつめていうならば、聖霊の働きだ、と思うのです。

宣教百年の頃の教団は、様々な「方式伝道」や、十億献金運動などが行われ、伝道圏伝道についての提言なども賑やかになされて、教団・教区単位の組織的な伝道が活発になされていきました。それらによって開拓され、今日教会となっているもの、違った形で伝道協

力として残っているものなどが多々みられます。「昔はよかった」とか、「もう一度昔に」という懐古趣味ではなく、御霊の働きを祈り願いつつ、地域への伝道の使命感が湧き上がり、違いを乗り越えた教会同士の信頼関係が生まれることが切に願わされます。

この本でわたしは、出来るだけ説教じみたことは言わず、証しをしたと思います。ただ、この本に一貫して流れているわたしの考え方をあらかじめ申し上げておきたいと思えます。その第一は、「教会を信じる」ということ、第二は、説教によって教会は覚醒し、成長し、前進する、つまり「説教によって教会は建てられる」、ということです。この中身が明確にされているところで、教会は本来の霊的な力を発揮する。つまり、聖霊が豊かに自由に働くのです。そして、ここに生きた信仰の事実が起こされていき、それを共有するところで伝道の協力が力と意味を持つてくるのだ、とわたしは思っています。

わたしがこれからお話しする四国と千葉の二つの例が、もしそのささやかな例として皆さま方のご参考になるならば、著者としての幸いはこれにまさるものではありません。

二〇〇九年一月二五日

内容目次

編集者によるまえがき 1

著者によるまえがき 4

序 仙川時代の体験から 11

第一章 四国での体験から学んだこと 19

第一節 協力伝道という賜物 20

たすきがけ伝道 20

ある時の体験 26

城辺教会で学んだこと 32

もう一つの奇跡 40

第二節 信徒たちの働き 45

福音の種蒔き	45
「為ん方つくれども希望を失わず」	50
第三節 伝道協力と財政的互助の問題	55
霜越先生のこと	55
自立と連帯	59
祝福と招き	67
その後の四国教区互助体制について	69

第二章 千葉での体験から 73

付録 説教Ⅰ 「神の栄光のために」 84

説教Ⅱ 「われらのパノラマ」 94

著者によるあとがき 102

序

仙川時代の体験から

明治二三年、ひとりの青年がマッシュマロやキャラメルなどを荷車に積み込んで東奔西走していました。彼はお菓子を売り歩きながら、日本の伝道を夢見ていました。その名は、森永太郎でした。アメリカに修行中、洗礼を受け、菓子製造の修行のかたわら、日本にキリストの福音を宣べ伝えたい、できるならば教会を建てたい、という熱い思いを胸に暖めていたのです。菓子を載せた荷車には、次の聖句が掲げられていたと伝えられています。

「『キリストイエス罪人を救はん為に世に来たり給へり』とは、信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首なり。」テモテ前書一章一五節

日本人に福音を宣べ伝えるためには、まず自らが自主独立していなければならぬ。そのためには菓子製造販売こそ自分の使命であると自覚して、森永太郎は森永製菓をはじめたらしいのです。太一郎氏はアメリカから帰ってきてから、東京に小さな工場兼お店を作ったのですが、その時に手伝いをするために、故郷伊万里の隣町、有田から呼ばれたのが大串松次でした。つまり、わたしの祖父です。大串松次は、創業期からお手伝いをし、例の荷車も一緒に押ししていたと伝え聞いています。

松次はその時はまだキリスト教を受け入れていませんでした。森永太郎氏を助けて森永が会社として成長することをひたすら願っていました。生涯をかけて会社に仕え、骨の

髄まで企業人であったと言えましょう。しかし、その生涯の最晩年に、洗礼を受け、大回心を果たすこととなります。息子である大串元亮（もとすけ）が先に洗礼を受け、献身してキリスト教の牧師となっていたことがきっかけとなりました。元亮が信濃町教会の副牧師をしているときに、松次は家庭集会の中で、今までの生涯を振り返ってこう言ったそうです。「企業というものは、仕えても仕えても空しい。これからは教育と宗教にこの身をささげていきたい。」その後、八〇歳で洗礼を受け、「これで教会を建ててほしい」と志を伝え、献金としてまとまったものをささげました。信濃町教会はこれを受けて、調布市の仙川に開拓伝道を決意しました。そして、その仙川伝道所の主任担任教師として、元亮が派遣されました。当時、東京都といっても仙川は、まだまだのどかなところで、京王線仙川駅の周辺は見渡す限り田畑が続いていました。都心の信濃町からすると、「地の果て」だったのでしょう。

そこで、仙川伝道所は使徒言行録一章八節から取った聖句「地の果てまで福音を」を教会標語として成長していくこととなります。その当時、わたしは四歳。兄弟や、会員の他の子どもたちとテレビを見ながら、仙川伝道所の最初の夕拝の時間を過ごしていたことを思い出します。

仙川伝道所が開設されたのが一九六五年。二年目に会堂建築を果たし、四年目には第二種教会（会員おおむね二〇名以上）を飛び越えて第一種教会（会員五〇名以上）の建設となりました。破竹の勢いで成長していきました。その頃、一九七〇年前後は、どこの教会でも若者が教会にたくさん出入りしていた時代です。教会学校も、子どもたちが溢れていました。子ども会などの行事、夏のキャンプ、ボーイスカウト、バザーなど、開拓伝道の教会としてできることは何でもやるということだったようです。礼拝にも斬新な音楽が取り入れられ、若々しい教会として勢いよく成長していきました。そんな中でわたしも過ごしましたから、牧師館に住んでいる不自由さを多少は感じながらも、それにも増して「教会は楽しいところだ」という意識が子どもながらに植え付けられていたのではないかと思えます。これは、今から思えばとても有り難いことと思います。開拓伝道の喜び、教会が成長していく勢い、そして充実感、教会全体の空気ともなり、またそれが、子どもたちにも肌で伝わってきたのです。

仙川教会が一五周年から二十周年を迎える青年期となって、時代は一九八〇年代となり、教会の勢いはさらに新しい動きとなって現われて参りました。そのひとつが、献身者が次々と誕生していったことです。もうひとつは、開拓伝道の新たな展開です。

「教会は牧師を生み出し、伝道所を生み出したときに一人前となる」という言葉を父がその当時よく口にしていました。仙川教会も青年期から成熟した教会へと成長する転換期を迎えつつありました。そこには同時に、産みの苦しみも伴いましたが。

まず、青年期の仙川教会で副牧師であった三吉信彦牧師、明牧師夫妻が郷里の奈良の高の原で開拓伝道を開始され、仙川教会はその母教会として支援を続けました。現在の高の原教会となっています。

また、もうひとつの動きが出てきました。

仙川から車で一時間ほど行ったところに八王子市があります。その八王子市めじろ台に仙川教会のひとつの家庭集会有りました。渡辺文子さんというひとりの姉妹が病床につきながら「この地に教会を」との祈りを持っておられました。その祈りの実現を見ることなく召されました。その祈りを受け継ごうと、仙川教会はめじろ台の家庭集會を守り続けたのです。遺された未信者のご主人と仙川教会員の娘さんを中心とする家庭集會でした。ちょうど娘さんが青年会のメンバーだったことがきっかけで、仙川教会の青年会のメンバーもよくこの家庭集會に参加しました。現在、仙川教会の主任担任教師をしているわたしの兄、大串肇が、この当時、青年会の会長でした。「青年会としてめじろ台の伝道に

全面的に協力しよう。そして、渡辺文子姉の祈りを引き継いで、教会をこの地に建てることを共に祈ろう」と声をあげました。青年会にまず火が点されました。その祈りの炎が少しずつ共有され、広がっていったことが、後に大きく展開していくこととなります。

その後わたしが青年会の会長を引き継いだとき、八王子の寺田団地というめじろ台駅から車で十分ほど行った団地で、こども会を毎月一回開催することにしました。このこども会の開催のため、青年会は熱心に奉仕に取り組みました。こどもたちを集め、一緒に遊び、聖書に関連した映画や紙芝居などをしました。ずいぶんたくさんのおもちゃが毎回集まりました。やがて、通いでは限界があるということで、神学生が住み込むようにと牧師からいわれ、借家を借りわたしともう一人の神学生が二人住み込むようになります。毎月一回の家庭集会在、借家での毎週日曜日の夕拝となり、子ども会も毎週日曜日の教会学校に移行し、教会学校分校として位置づけられるようになります。このため、仙川教会の青年会、神学生、そして、中高生までが、この八王子ではじまった熱い運動に巻き込まれていくのです。若者たちが教会の奉仕のために力を惜しまず労する、そして、開拓伝道の幻をいだきながら祈りにおいて熱くなる。そういうことができたのは、わたしにとって本当に貴重な経験となりました。このような開拓伝道のお手伝いをさせていただく中で、

わたしはなにもない中から一つ一つが生まれていく喜びを知り、開拓伝道にへはまっていくこととなります。

仙川教会はこのように、産みの苦しみを経て無事に伝道所を出産します。教会にそれだけの体力があった、ということでしょう。八王子めじろ台伝道所は、一九九〇年、日本基督教団の伝道所として開設されます。ちなみに、その後は東京教区西支区（現在の西東京教区）によって、親教会群による支援体制の支えを受けます。その後、西東京教区姉妹教会群及び有志の祈りの支援となって、ついに二〇〇九年六月、西東京教区の認可を受け、「めじろ台教会」として第二種教会設立の運びとなりました。神学校を卒業してから、わたしもずっと週報の交換をしていましたが、神様の顧みの中、八王子めじろ台伝道所が教会として成長したことを知って心から感謝し、主をほめたたえた次第です。

第一章 四国での体験から

学んだこと

第一節 協力伝道という賜物

たすきがけ伝道

わたしは八王子めじろ台伝道所が開設される前、一九八六年に、東京神学大学を卒業し、高知県宿毛市にある宿毛栄光伝道所というところに遣わされました。宿毛市の隣の幡多郡大月町は、当時公共の交通機関を使って東京から最も移動に時間のかかる場所と言われていました。地理的に言うと、「正真正銘の地の果て」という感があります。しかし、悲壮感は全くありませんでした。むしろ、「地の果てまで福音を」の通り、わたしのような弱い器を用いていただけることを感謝して開拓伝道の任についたことを覚えております。

宿毛栄光伝道所は開設されて二年目の伝道所でした。建物は一軒長屋の借家です。一階は四帖半二つをつなげて礼拝室とし、二階の六帖一間がプライベートな牧師の住居でした。独身でしたから、それで十分です。

招聘がたいへんユニークでした。宿毛栄光伝道所ではわたしが主任担任教師でした。その親教会であった中村栄光教会は、隣町の四万十市（当時は中村市）に立つ教会です。わたしはその中村栄光教会の兼務担任教師でもあったのです。そして、中村栄光教会の内田汎牧師はその主任担任教師でしたが、宿毛栄光教会の兼務担任教師でもありました。つまり、両者がたすきがけのように関係しあう共同牧会の形だったのです。それでも、実質は内田先生が主任、大串が担任ということでした。中村栄光は親教会でしたが、実際は、ひとつ家族の兄弟のように、宿毛の教会と共に歩んでくれました。最初のうちは、合同礼拝、合同長老会、合同夏期学校など、何でも合同で行いました。大串が慣れ、独立してきたところから少しずつ独立していき、十年間で完全に独立することができたのです。

当時わたしは独身で、卒業したての右も左もわからない〈ひよっこ〉同然でしたから、何でも内田牧師に学びました。すべて真似ることからはじめたのです。祈禱会や家庭集会にも同行させていただきました。葬儀や冠婚葬祭など、地方の教会に主任で遣わされると最初は頼るものもなく何もかも独りですることになり大変なのですが、内田先生が全て一緒にしてくださいました。

中村も宿毛も辺境の地でしたから、四国教区や高知分区の用事で移動するときは、往復

の自動車の中で、教会のこと、牧会のこと、また自分自身の悩みも含めて、聞いていただき、生きた学びをすることができました。

何しろ高知分区の牧師会に片道三時間はかかりました。四国教区の集会だったら、まだ高速道路のない時代ですから、五、六時間はざらでした。最初はそんな時間は無駄のように思えました。しかし、次第に考え方が変わってきました。伝道とは時間がかかるものなんだ、こんな無駄な時間と思える時間が、伝道にはとても大事なんだ、と思うようになりました。地方の教会では、五年、十年では芽が出ないのは当然です。十年たってようやく地元の人に認められるようになります。それから、いよいよ本番になります。

わたしの場合も、信徒の方々が御言葉によって成長する姿を、十年、十五年たって見出すことができました。ですから、あせらず、たゆまず、神様の時を待ってじっくり取り掛かることが大事です。かつて、交通の不便なところを昔の宣教師や先達の牧師たちは船や徒歩を使い、大変な時間をかけて辺境の地まで福音を届けてくださいました。数多くの先達からも伝道のスピリットを学ばせていただきました。

さて、中村・宿毛のコンビは、その頃流行の電気店のチェーン店にあやかって、「栄光チェーン」と呼ばれました。内田・大串の関係は「たすきがけ人事」と呼ばれ、時にはひやかされるほど、一心同体で行動を共にしていました。しかし、このコンビが、その後千葉支区で再結成されて第二の開拓伝道に着手することになるとは、その当時は夢にも思っていませんでした。

牧師同士が交わりを持ち、教会としても交わりを持ち、お互いの教会を覚えあい、祈りあっていく中で、孤立しがちな牧師や信徒が、弱らないように守られていたのです。これが伝道協力の醍醐味だと思います。

更にまた、近隣教会の交わりとしては、後に伝道協力として結実していく、若手牧師たちによる学びの会が生まれました。説教について共に研修し、批評しあう説教セミナーにも参加しました。わたしが遣わされたのは高知県の西側ですが、反対側の東には「香長伝道圏」の説教セミナーがありました。徳島県の南端から室戸、安芸、香美、南国、嶺南、瀬戸と広がる地域を一つの伝道圏として協力伝道を繰り広げていました。後に高知県の西と、愛媛県の南の地域の牧師は四国・西南地区伝道協力体制を立ち上げ、説教セミナーも独立し、今日まで続いています。

「牧師は教会によって育てられる」とよくいわれます。本当にそうだと思います。信徒の方は、卒業したてのひよこ同然の牧師の口から、よくも毎週忍耐して御言葉を聞き続け

てくださり、祈ってくださいましたことか。本当にわたし自身、教会によって育てられたと思っています。

それと同時に、牧師は牧師の集団の中でも育てられます。牧師にも指導や牧会が必要です。よき先輩や友を得て、相互牧会によって育てられます。時には厳しく、時にはあたたかく。わたし自身、その交わりによってどんなに支えられたことでしょうか。そのような学びや交わりの中に身を置くことで、自分がいつのまにか、狭い殻に閉じこもっていたことに気付かされます。また、牧師にとっての本当の勝負の場は説教であると思っていますが、牧師には常に、その説教者として自ら負うべき課題を様々な他の課題に摩り替えてしまふ誘惑があります。教会のせいにする、信徒のせいにする、地域のせいにする、そんな誘惑もあります。わたしが学ばせていただいた牧師集団は、そういうところは大変厳しかったのです。厳しいですが、問題の核心を指摘されたり、気づかされたりします。特に、説教の中にそれらの問題がすべて現われるとも言えますから、説教の批評を受けることは大変有益でした。自分の説教が信徒に届いていないのではないかと指摘されること自体は死ぬほどつらいことですが、そこで静かに思いめぐらしてみると、自分の説教者としての課題が改めて見えてくるのです。厳しいけれど、ありがたいことでした。

このように、牧師のために祈り続けてくださる信徒の方々と共に、先輩や同労者の温かい愛情、配慮、友情にどんなにか支えられてきたことでしょうか。わたしにとって、そのような牧師の交わりがなかったら、今の自分はなかったのではと思っています。それ故、若い牧師には特に、そのような仲間、先輩との交わりを見出すことをお勧めします。

なお、四国教区には教師の謝儀を援助する「四国教区互助制度」があります。宿毛栄光伝道所は三年間、この互助制度によって支えられました。その後は自給教会となりましたが、この四国教区互助制度なしには、小規模教会の多い四国では牧師を支えきれないのです。この互助の制度については、後で伝道協力の項目のところでも再び触れることにします（第三節）。

このような二重、三重の協力や交わりによって、助け合い、伝道していくことは、大変ありがたいことでした。地方の教会は、それぞれが規模の小さい教会です。地域的に孤立し易い条件が多いだけに、牧師の交わり、教会の交わり、信徒同士の交わり、そして、伝道の協力が自然と大切にされていたと思います。

ある時の体験

宿毛栄光伝道所は、伝道所として開設して二年目に四国教区の互助制度によって牧師招聘を決定し、わたしが着任しました。すべては中村栄光教会が範例となりました。中村栄光教会も同じように、四国教区の互助制度によって内田牧師を招聘し、成長してきた教会だったのです。中村栄光の開拓のためには高知分区の篤い交わりと支えがありました。

宿毛栄光伝道所の場合には、今まで述べてきたように中村栄光教会との共同牧会、高知分区の交わり、四国教区の特に互助の支えなど、二重三重に支えられ、急速に成長しました。大串を迎えた一九八六年度に、建物付の土地一八七坪を三千五百万円で取得しました。当初現住陪餐会員二十名、一八七万円の手持ちしかなかったにもかかわらず、そのような決断に踏み切ることができたのは、中村栄光教会が宿毛栄光伝道所のことを自分のことのように一緒に取り組んでくださったこと、また、高知分区、四国教区との信頼関係が篤かったことが大きな要因でした。三年間で教区互助を辞退し、自給教会となり、第二種教会、宗教学人の設立など、破竹の勢いで成長していったのです。

しかしながら、教会の内実はい外的成長とはうらはらに、非常に混乱し、いつ分裂してしまってもおかしくないような苦しみを抱えていたのです。今まで、人生や教会で経験してきたことがそれぞれ違う人々が、ひとつところに集まって教会を形成するのです。しかも、不動産購入は金銭の伴う大事業です。意見の衝突、仲たがい、牧師批判、教会批判、ありとあらゆるもめ事が起こってきました。毎年のように人を招く祝いごとをして、その度に、高知分区の方々には遠く室戸の東からもかけつけてくださり、たいへんありがたく、恐縮したのですが、実は、そのたびごとに、伝道所内ではトラブルが起こり、その收拾のために牧師が走り回るといったことの繰り返しでした。牧師もまた神学校を出たばかりだったので、ただオロオロしていたのでしょう。あっちで火があれば消しに行き、こっちで火があればまた出かけて行って火を消す。それでいて、くすぶりは収まらず、やればやるほど、ますます火は大きくなるといった具合です。次第に疲れがたまってきました。いつしかノイローゼぎみになってきて、まず、電話を取ることが恐ろしくなってきました。微熱が出て、いつになっても下がらない状態が続きました。人間ドックで調べて見ると、すい臓に炎症を起こしているとのこと。上京した折に神学校の学長のところに行つて泣きつきました。しかし、あと十年はがんばって来いと言われ、追いつかれるようにして泣く泣く任地に戻ったことを覚えています。

そんなある土曜日のことです。いつものように問題発生の電話が入り、その收拾のために信徒宅でお話をうかがい、祈って帰宅すると、夜も十時を回っていました。翌日の説教準備もほとんどできていない状態です。限界を覚えました。ぐったりとして、伝道所の礼拝室のじゅうたんの上にバタっとうつぶせに倒れて動けなくなりました。真っ暗な中で叫びました。

「主よ、もう限界です。わたしはもう宿毛でやっていけません」。

「主よ」、「主よ」、となんだか繰り返していると、静かな声が聞こえてきたように思っています。「そうか、限界か。確かに、お前はもう宿毛では歩めない。しかし、わたしにはできる。」しばらくして気がつきました。翌日の説教の箇所は、マルコ伝一〇章二三―三一節の「富める青年」の箇所でした。

「人にはできないが、神にはできる。神は何でもできるからである。」（口語訳）

その御言葉が、生きた言葉として迫ってきたのでした。その時にはと気づいたので。自分は本当に神の御力を信じてゆだねていただろうか、と。自分の知恵や力でなんとか問題の收拾をはかろうとしてきたのではないか。自分が走り回ったらなんとかかと思っていたのではないか。そして、人の気に入る牧師になろうと懸命に皆の要望に応えよう

とばかりしてきたのではないか。「そうか、『わたしにはできる』という方にゆだねたらいいんだ。」それは一体、どういうことなのか、と思いつきました。「心身共に疲れてしまった今、自分にできることは説教すること、祈ることではないか。それならこのことに専念しよう。何と言われてもよい、どう思われてもよい。あとのことは自分ではできないと言おう。もしそれで教会がどうにもならなかったら、そのときこそ、辞任してこの地を離れよう。」

その晩腹をくくることができました。

翌朝の説教のでき、さぞかし感動的だったかというところではありません。なんのへんてつもない、しどろもどろのへたな説教でした。しかし、このあとで、思いもよらぬことが起こっていったのです。

もう歩めないという状況だったのに、次第に教会の中は沈静化していきました。気がついてみると、かつては大きな山のように眼前にあったものが、いつのまにか、小さな丘となって自分の後ろにあるのです。もちろん、問題や課題がまったくなくなったわけではありません。しかし、小さくなっているのです。いつのまにか超えられていたのです。牧師としてどこに立つべきなのか。何によって勝負するのか。そういうスタンスというもの

が、この時期に少しづつ確立していったように思います。そしてそれは、教会とは何なのかということの発見でもあったのです。

この後、さらに二つの出来事を通して、このことを確認させられました。

ひとつは、会堂建築のことです。

会堂建築というのは、教会にとってキリストの喜びがあふれる時ですが、また同時に、キリストの苦しみも満ちる時です。大変大きな事業です。お金もかかります。わたしたちの生き方が問われ、信仰が問われます。存在が揺さぶられるような試練ともなり得ます。宿毛栄光教会の場合もそうでした。一旦は治まっていた教会の傷の痛み、トラウマに触れるような出来事が何度か起こりました。かさぶたが取れて膿みが出てくるのです。話し合えば暗礁に乗り上げ、長老会も険悪な空気となり、この頃、牧師はなんと辞任を覚悟したかわかりません。長老会の中があまりにももめて混乱した日、「もうこれ以上は無理かな」と思っていたところに、一本の電話が入りました。このような行き詰まりの時に、必ずと言っていいほどタイミングよく電話をかけてこられる牧師仲間がいました。近永教会の声名弘道牧師です。四国西南地区で最初の時から学びと交わりをして頂いた方です。いや、最初は釣り仲間だったでしょうか。ついお互い長電話になってしまって、「ほら、男の長

電話がはじまった」とかみさんたちに白い目で見られたものです。この時も、長いこと話を聞いてくださり、その後でこう助言されました。「今は辞める時ではないと思う。コミュニケーションが十分できているとはいえない。君の確信していることを十分率直に話してみたらどうだろう。あるいは文章にしてあらわし、良く話し合うべきだろう。議論を尽くしてみ給え、その上でどうしてもダメならば、辞任もあるかも知れない。しかし、もう少しねばり給え。このような中でこそ、なぜ教会は会堂建築をするのか、そもそも教会とは何か、その基本的なことを確認することが、一番大事なのではないか。」

まことに適切な助言でした。いつのまにか、また主にゆだねることを忘れ、自分の思いが先行していたのではないかと反省させられました。静まって祈ることからはじめました。そして、教会とは何か、なぜ建築が必要なのか。聖書に聞きつつ、長老会のメンバーと共に学び、確認し、時を待ちました。建築のための話し合いも一旦凍結、共に静まって祈りの期間を持ちました。

この「主の前に静まる」ということが大切でした。宿毛栄光教会は、この時期にとっても大切な経験をすることができたのです。主がご自身の身体なる教会として会堂建築を必要としている。それならば、根本的には、必要は主が満たしてくださるといふ信仰を確信す

ることができました。牧師も長老も信徒も悔い改めつつ祈り、その結果、できるだけ多くの人の意見を排除せずに取り入れた大きな案ができました。最初の計画より一千万円多い会堂・牧師館の建築総予算四千五百万円の決断に導かれました。献堂式の際に読まれた聖書は箴言一九章二一節でした。

「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する。」

人の思いをこえて主がお働きくださること、そのことにへりくだって身をゆだねること。その後幾度も幾度も試練を経験しますが、結局いつもここに帰って参ります。

城辺教会で学んだこと

もう一つのこととは、城辺教会との関わりの中で起こりました。

順序は多少前後しますが、一九九九年の宿毛栄光教会の会堂建築に先立って、隣の愛媛県城辺教会の代務を三年間（一九九四年から一九九六年）いたしました。そして、今まで述べてきたことに加えて、教会と伝道について更に決定的に重要なことを学びました。

城辺教会は、宿毛栄光教会から車で三〇分ほどいったところにあります。今は城辺の隣の町御荘町へ移転し、愛南教会と改称されています。わたしが代務をしていたときの現任陪餐会員は八名、半数以上が六〇才代以上でした。宿毛が高知県の辺境の地であるなら、城辺は愛媛県の辺境の地です。会員数は少なく、牧師は転任が多く、定住年数の少ない牧師がほとんどでした。無牧もなんども経験しています。わたしが代務をする前の二年間も無牧、わたしの三年を合わせて計五年無牧が続いたこととなります。土地は一二〇坪ほどありましたが、公道に接していない土地でした。唯一公道に出る方法は隣の私道を通らせていただく方法です。しかもお隣との関係がよくなく、改築か新たな建築の可能性も相当厳しい敷地でした。さらに会堂も牧師館も老朽化し、今にも倒壊しそうな危険建造物で、実際、わたしが代務をしていた間に使用できなくなりました。ことほどさように問題は山積みだったのです。四国教区の互助制度によって教師招聘が実現したとしても、牧師館はそのままで使えないし、建築困難な土地での会堂建築の課題を抱え、しかも、財政的に十分な蓄えがあるわけではありません。代務者として礼拝に行っても、どうも覇気がなく、なんとなく重い空気が漂っていました。これからのことを相談しても、小さく弱い教会だからお手上げ状態という閉塞感・行き詰まり感が感じられました。長い教会の歴史の中で、ろうそくの灯が次第に消えかかっているような典型的な小規模教会でした。しかし、

この疲弊した小さな群れが大きく変わっていく姿をまのあたりにすることになるのです。

わたしは代務を引き受けるにあたって、「四国西南地区」の教師たちの協力の中で取り組むということを決意致しました。そのときまでに、すでに、近永教会の芦名弘道牧師、須崎教会の黒田若雄牧師とわたしの三人が中心となり、牧師会での学びを続けていました。この三人に中村栄光教会の内田汎牧師も加わっていたとき、交代して説教の任に当たったのです。それぞれの教会の礼拝を午前中にささげ、午後三時からの礼拝でした。遠くは一〇〇キロメートル離れた須崎から駆けつけてくれました。牧師会では城辺教会の現状を認識する中で、ひとつのことを明確に確認しました。「礼拝に集中しよう。そして、生きた御言葉に共に聴こう。そこからすべては始まる。」いろいろな思い煩いを捨て、無くなって、ひたすら礼拝に集中する。あたり前のように聞こえますが、これは決して当たり前ではありません。牧師たちも真剣勝負、信徒の方々も真剣勝負になったのです。他には助けがないと自覚しましたから、そこには真剣な祈りが充滿していました。礼拝に出ると自分の力を超える力が加わってくるという感覚がありました。城辺教会の礼拝で説教奉仕をした者たちが皆経験したことでした。何事かが起こる、そんな予感が感じられました。そして実際、御言葉に生かされる喜びが次第に充滿してきたのです。信徒の方々の意識が変化しました。「自分たちは小さくて、貧しく、無力だ」という意識から、「小さくても神の教会なんだ、貧しくてもキリストのからだなる教会なんだ、弱くても、必要は主が満たしてくださいさるのだ」。そういう「神の教会」という信仰が芽生えてきたのです。「何も無く、困難ばかりのわたしたちだけと、神の教会なんだから、主が必要とされるならば、不可能なことはない、主が必ず備えてくださる。」たいへん素朴で単純な信仰です。しかし、この信仰が確固たる確信となったときに、この疲弊した小さな教会に大きな出来事が起こったのです。

それはまず、教師の招聘に現われました。教師を迎えるためには、今までの経常会計に年百万円は献金を上乘せしなくては予算が成立しません。現住陪餐会員八名といっても、その中には高校生を含む三人家族もありました。残りの半数は主婦、半数は年金生活者です。この八人で、通常会計の年間百万円を献金によってアップする。常識で考えたら不可能な数字と思われました。事実、代務をはじめた最初の年は、この決断を前にして前進することができなかつたのです。再度の決断に立たされた時、一番腰が引けていたのは代務者であつたわたしでした。先回りして「まだ無理かな」と思って腹案を用意していました。城辺教会に対する援助協力体制を先に作ってから、教師を招聘する計画を提案しようとし

て温めていたのです。教師招聘を決断する臨時役員会で、わたしは自分の案を提案しましたが、城辺教会の皆さんは退けました。「通常会計のこの分は、わたしたちでささげさせていただきます。最初から、援助を当てにしているはいけません。精一杯のことをしたら、あとのことは主が必要を満たしてくださいと信じます。」先のことは主にゆだね、信仰によって前進する、と決断したのです。この臨時役員会の席にいて、わたしは聖霊によって地の基が震い動くような畏れを覚えました。

そのとき与えられた御言葉はヨハネによる福音書一章四〇節です。

「もし信じるなら、神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」（口語訳）

そのニュースはすぐに説教者を送り出している諸教会に、またその牧師たちに報告されました。後日、協力していた教会から牧師と教会の代表の信徒が集まり、緊急の会議を開きました。自分たちはこの城辺教会の信仰の決断に、敬意をもって心から賛同したい。城辺教会のためにぜひ、援助献金をさせていただきます、この御業に参加させていただきます。城辺教会のサイフを無理にこじ開けるようにして、援助協力体制を作ることになりました。

そして、ある信徒の発案で、これを機に城辺教会の協力だけでなく、この地域一帯の伝道について、一緒に協力していこうということとなり、「四国西南地区伝道協力」という協力体制が誕生しました。それまでは、牧師会だけでしたが、その後、年に一回の協議会を中心に、夏季伝道実習、合同礼拝、説教セミナーなどが行われるようになり、今日に至っています。

二〇〇九年度には、須崎教会、宿毛栄光教会、中村栄光教会（以上は高知分区）、愛南教会、近永教会、長浜教会（以上は南予分区）などがこの伝道協力体制に加わっています。城辺教会に対する援助は年間七〇万円ほどがささげられ、経常会計ではなく、牧師館、集会所の家賃にあてられるようになりました。

その後、城辺教会は矢野敬太牧師を招聘します。その歩みはまさに出エジプトの歩みそのものでした。結局、建物は代務期間中に使用できなくなり、信徒の家を開放していただき礼拝を行いました。牧師館はアパートを借りました。七十年の歴史のある教会が、土地を離れて再出発する。実質は開拓伝道でした。しかも、言い方は悪いですが、負の遺産を背負っての出発ですから、ゼロからの出発ではないのです。これは現実にはなかなか厳しい荒野の旅たちです。しかし、矢野牧師を中心とする小さな群れは、それを誠実に歩みましました。礼拝中心、御言葉中心の姿勢は全くぶれずに、ただ雲の柱、火の柱として導かれる

生ける主を信じての再建の旅でした。二年間の信徒宅での礼拝、九年間の借家での礼拝を経て、二〇〇五年、ついに隣町の御荘町のバイパス沿いの日本料理レストラン跡地を買い取り、みごとに移転を成し遂げました（三五〇〇万円の事業でした）。二〇〇九年度には外部返済は終了し、四国西南地区伝道協力からの援助献金も辞退しました。平成の市町村大合併によって、この地域は愛媛県南宇和郡愛南町となり、教会はまさに愛南町の中心に位置するところとなったので、「愛南教会」と改名しました。人数こそそれほど増えただけではありませんが、愛南地区の伝道に使命を燃やし、今も元気に歩んでいます。

わたしはこの地方小教会が再建されていく姿をまのあたりにし、教会の底力というか、教会を信じる真の力、聖霊のなせる業を経験させていただきました。教会の真の姿、真の力はどこにあるのか。それは人の数とか、置かれている環境、経済的状况によってはかることはできません。キリストのからだなる教会、神の教会の底力というものがあります。それは礼拝において、御言葉によって、目覚めさせていただくのです。城辺教会の場合は、様々な困難な課題に囲まれて、礼拝という一点に追い込まれていったからこそ、導かれたことでしょう。様々な力がすべてそがれ、ただ礼拝だけしかなくなる。ただ説教しかなくなる。だから静まって真剣に祈りを合わせる。そういう経験の中からこそ、教会の底

力が発揮されたのだと思います。説教によって教会が建設される、とはそういう意味なのではないでしょうか。そして、それはひとり説教者だけの課題ではありません。聖霊によってここに出来事が起こり、ここから何かが始まるという期待と祈りをもって、真剣に御言葉を求める群れがあって、はじめて成り立つことです。

このようなことが起こるとき、試練もまた神の導きであったことが分かって参ります。繰り返し申しますが、行き詰まりしかなかったような城辺教会にとって、礼拝があり、その礼拝で御言葉を聴くことができるということが、唯一の突破口でした。だからこそ、集中して真剣に祈り求めたのであり、主の憐れみによって、聖霊の奇跡が起こったのです。

わたしは、わたしたち日本基督教団の状況を考えたときにも、城辺教会が経験したような、どうにもならない行き詰まりと疲弊の現実に立ち尽くすということが、大変大切ではないかと考えます。長い歴史の中で老朽化して朽ち果てた会堂のように、役に立たなくなった敷地のように、困難な現実に囲まれた袋小路のように、小さく貧しく、弱い存在。その歴史の現実を直視しつつ、なお、この教会が、この教団が、「神の教会」であるという真理の発見が、新しい伝道の起点となる、と信じるものであります。

七つ一つの奇跡

さて、城辺教会で起こった信仰の出来事は、周辺地域へと飛び火をして行きました。それと前後して四国西南地区伝道協力体制ができたことは先ほど述べました。それだけではなく、その当時の須崎教会の牧師館建築と宿毛栄光教会の建築にも、大きな影響力を及ぼしたのです。

実は、宿毛教会の建築はなかなか重い腰があがらないでいたのです。大串が着任した年度に三五〇〇万円の事業をして、建物つきの土地を取得して一旦落ち着きますと、次は会堂建築ということにはなかなか進みませんでした。教会総会で協議しても、一向に進みません。いつしか、話題にも上らなくなっていました。そんな折、大串が城辺教会の代務になったのです。城辺教会の代務就任に関して、宿毛では最初からすんなり決まったわけはありません。城辺は愛媛県にある南予分区に属していたので、距離こそ近いとはいえ、分区をこえて自分たちの牧師を代務に送らなくも、南予は南予でやってほしいという正直な気持ちがあったのです。

しかし、たまたま南予分区は城辺に代務を送れない事情でしたので、距離的には一番近い宿毛栄光教会にお鉢が回ってきたわけです。城辺の代務に大串牧師が時間と労力を注ぐということは宿毛としては、微妙な思いがあったことは確かです。しかし、このことも主がお用いくださって事を進めて行かれたのでした。

こんなことが起こったのです。

城辺教会が牧師の招聘を決断して希望に燃えて準備を進めている頃でした。今は故人となられましたが、当時の東京神学大学の松永希久夫学長が高知分区の後援会にお出でになられた際に、せっかくなので城辺まで足をのばしていただいて、特別伝道集会を計画することになったのです。

伝道集会としては特別な準備をしたわけではありません。ただし、もちろん、松永先生とは集会の前に打ち合わせをして祈っていました。すると、新来会者がぞくぞくとおいでになるのです。しかも、その「ぞくぞく」というのがたいへんな数だったのです。はっきり覚えていませんが、二〇名から三〇名ほどの新来会者、いや、もっといたでしょうか。宿毛からの応援隊もありましたが、全体で六〇名くらいになったと思います。会堂は満席となりました。たしか、半数近くが新来会者であったように記憶しています。普段の礼拝出席は十名にも満たないのです。新来会者など、めったに来ません。しかし、この晩は

違っていました。熱気にあふれていました。このようなことは城辺教会七〇年の歴史のなかではじめてのことだったと思います。老朽化した会堂は今にも音を立てて底が抜け、屋根が落ちそうな状態でした。

城辺教会は再び聖霊によって大きく揺れたように思いました。いや、事実揺れたのです。この伝道集会をきっかけに、二つの大きな出来事が起こりました。ひとつは、あまりにも盛況だったため正直床が抜けるのではないかとハラハラしましたが、その特別伝道集会の開催によって、会堂が事実危険建造物であることに気がついたのです。もし外部の人を招いたときに何かが起こったら、あるいは、常時使用している信徒の人に屋根が落ちでもしたら、責任の取り様のないことです。それこそ城辺教会の歴史はそれで終わると思われました。役員会で緊急に話し合い、会員の総意を得て、思い切ってこの日をもって使用を禁止しました。それからの礼拝場所をどうするのかと思索していたところ、「わが家を使ってください」と信徒宅からのありがたい申し出がありました。

この時点から、信徒宅での礼拝が二年間続きました。その後借家での礼拝が九年、そして、この度の移転と続きます。つまり、城辺教会の再建事業、出エジプトと荒野の旅がここから具体的にはじまったのです。七〇年間の歴史のある土地と会堂、牧師館を捨てて新しく開拓伝道同然の旅立ちをする。こんな出来事がなかったらなかなか決断のできなかったことだったでしょう。聖霊の促しでした。

第二の出来事は、宿毛栄光教会に、聖霊の火が飛び火したことです。この日の城辺教会の伝道集会に出席した中に、宿毛のメンバーがいました。城辺で起こっている出来事に、大変驚きました。自分たちよりも人数の少ない、困難だらけの教会と置いていた城辺教会で、驚くばかりの出来事を目撃したのです。自分たちもしっかりしなくては、と思ったのでしよう。このままの勢いでいくと城辺教会で先に移転事業と会堂建築がはじまる。大串が代務中にそういうことになったら、宿毛の会堂建築はずっとあとまわしにならざるを得ない。宿毛はがぜん奮起し、やる気を出したのです。神さまは様々な導き方を為さるものだと思います。聖なるライバル心、聖なるねたみと言ってもよいかもしれません。決して悪いことではないでしょう。「神様のなさることはすごい！」と思いました。今まであれほど長いこと話し合いを重ねてもビクともしなかったのに、外側から御手が触れられただけで教会が動き出すのです。今まで固まっていたものが溶けて、全く新しい御業がはじまるのです。これが聖霊の御業、生ける主の御業であると知りました。祈りも伝染しますが、生きた信仰の出来事も伝染します。共有し、大きく強くなっていくこともあります

し、刺激しあって、新たな伝道活動となることもあります。この祈りの共有、信仰の共有が、伝道協力の中心軸、推進力となっていくのです。

このようにして、一つの教会で起こった信仰の出来事を追いかけるようにして四国西南地区伝道協力の体制ができていきました。それは何か計画され、十分に準備されて整えられたというものではありません。ただ、一教会において聖霊によって揺さぶられた出来事が生じ、それが爆発力となって、伝道協力の中でうながされるままにできていったのです。生きた伝道の協力というのは、最初に理屈や理念があったり、制度や組織があったりしてはじまるものではないということを、わたしはそこから学びました。聖霊によって幻が与えられ、祈りが起こされ、信仰の出来事が起こる。まず御霊の出来事が起こり、それを教会が後から追いかけていくのです。そのことを、わたしは四国教区の伝道の姿から大いに学ばせていただきました。

さて、伝道協力そのものに触れる前に、開拓伝道の担い手について先にお話ししたいと思います。

第二節 信徒たちの働き

開拓伝道は牧師一人ではどうすることもできないことです。信徒がそこにいて、信徒を通して伝道が展開していかないと、牧師だけではなんともなりません。宿毛栄光の場合も、また城辺の場合も、そうでした。その中で典型的な例としてひとりの信徒の方のことをご紹介しますと思います。更にまた、牧師の家族抜きに開拓伝道を語ることもできません。家族あつての開拓伝道です（それは個人差もあります）。わが家の場合、破れ多い歩みでしたが、土の器が用いられたことを、証しさせていただきます。

福音の種蒔き

一口に開拓伝道といいますが、その開拓伝道を推進していく担い手は誰でしょうか。牧師が負っている部分はもちろんあります。しかし、それ以上に信徒の役割が大きいこと

を、わたしは宿毛栄光教会が伝道所から教会へと成長していく過程の中で学ばされました。宿毛で開拓伝道を進め、宿毛栄光教会を建てる中心になった信徒のひとりですが、酒井登志丸まるさんです。

酒井さんは中学校の教師をしておられました。昭和二〇年代後半のことです。その頃、賀川豊彦の神の国運動の一環として、農民福音学校というものが香川県の豊島てしまではじまりました。そこに参加した酒井さんは、キリスト教と出合い、手島にいる間に洗礼を受けて、宿毛に帰られました。当時、高知県の西南地域は幡多はたと呼ばれ、四国の中でも辺境の地といわれていました。面積は香川県と同じ広さ、人口密度は北海道と同じ、典型的な過疎の地でした。日本基督教団の教会は中村市（現四万十市）にしかありません。都会に出ていき、キリスト教に出会って郷里に帰る人はぼつぼついました。それぞれが孤立して、やがて信仰から離れてしまうことが多かったです。酒井さんは、教団の教会が地元でできることを切に願いましたが、その術を知りませんでした。そんな時、公文英猪ひでいさんという祈りの人と出会います。高知県の東側、芸西村というところで、やはり小さな教会の中心となって支えてこられた信徒の方です。公文さんはよく祈る人でした。一人一人の名前をノートに書き出し、毎朝長い時間祈ります。彼女のとりなしの祈りが芸西伝道所

を生み出し、支えていた力であることを知り、酒井さんは感銘を受けられます。公文さんの毎朝の祈りに影響され、支えられた酒井さんも、「宿毛に教会を」と祈るようになりました。

酒井さんは学校の転勤で、宿毛よりさらに過疎地に行かれました。日曜日に教会に行けないことも多かったのですが、結婚後、クリスチャンとなった奥さんの美字みな子さんと二人で家庭集会をはじめました。遠くから牧師が訪ねてきて、集会を持つ。そういう仕方、仕事の同僚など家庭集会に加わる人が少しずつ増えていきました。酒井さんは中村栄光教会の設立にも関わり、礼拝は中村で守りましたが、宿毛では家庭集会を続けられ、やがて家庭集会は夕拝へと移行していきました。そこから、宿毛栄光伝道所の開設へと導かれたのです。その間、永らく宿毛栄光の長老職をつとめ、困難な問題もたくさんある中、教会を支え続けられました。わたしが高知県から千葉県に移った後、会堂建築の返済も終了し、二代目の若い牧者を迎えることができたことに安堵され、酒井さんはいへん穏やかな心持ちと満ち足りた笑顔で永眠された、と聞いています。

生前、あるときに証しとして語ってくださったことを覚えています。

「自分はイエス様の種まきの話でいうと、石地だったかもしれない。茨の地だったかも

しれない。良い土地ではなかったことは確かです」と語りながら、こうおっしゃいました。「それでも、神様は憐れんで、現在ののように、多くの実りを与えてくださいました。それは、わたしが行ったことではなくて、もっぱら神様がしてくださったことです。」「伝道は神の業」と強調されたことを記憶しています。「神様が伝道してくださるということを信頼して、自分たちも、できる限りのことをしなくてはならない」と力説されました。酒井さんは行動の人でもありました。

人間関係においては、酒井さんは多少上手でないところもあり、誤解を招いたり、敵も少なくなかったりしたことを奥さまから伺ったことがあります。それだけ一途な方ではないらっしゃり、そして、心のある方でした。主への忠誠心にかけては決して人後に落ちない方でした。牧師を支え、教会のために祈り、教会が立つために全力で身を投じ、それを喜びとする方でした。

そういうお人柄が、教育の現場でも遺憾なく発揮されました。酒井さんはキリスト者として、真実の教師であろうと努められました。美字子さんが被差別部落の保育園の保母となり、差別を受けてきた子どもと家庭、地域に対して心を砕いていたときに、酒井さんも美字子さんを助けてみずから行動しました。被差別部落の地域で同僚の方と識字学級を開

かれたり、行政に対して陳情の先頭に立ったりされました。子どもたちのためにも、地域のためにも、誠心誠意取り組みました。その結果、被差別部落に対する宿毛市の行政は大きく改善へと動くことになりました。宿毛の歴史が動いたことになりました。しかし、改革の先頭に立たれた酒井さんは、裏では行政からにらまれ、教師としての晩年は、冷遇に甘んじることになりました。

それでもキリストを信じる酒井さんの真実を貫く姿勢は変わりませんでした。損な生き方をして、現実の嵐に耐え、祈り、なすべきことをなす。しかも、ユーモアと笑みを絶やさずにおられました。そんな酒井さんと奥さんの歩みに共鳴し、信頼を寄せた同僚や教え子たち、その親たち、地域の方々が無数におられます。そして、その方々の多くが教会に足を踏み入れました。酒井さん宅の家庭集会や伝道集会に訪れ、ある方は教会員となり、長老となり、またある方は、教会に直接加わらなくても、良き理解者や協力者として教会の周辺で助けてくれました。今もそういう方々が宿毛におられます。

神様は、酒井さんの生涯を通して、福音の種を宿毛という辺境の地に持ち運ばれ、蒔かれたのです。深く深く、地域の中に、人々の心の中に蒔かれたのです。そしてそれが、今、花開き、実を結んでいます。

種を蒔く人、それは確かに福音伝道者です。しかし、種まきは単にことばとしての聖書を伝えることではありません。心を伴わずにただ形だけ蒔くのでなく、生きる姿勢を通して蒔き続けるのです。その意味では、福音伝道者は牧師や教職とは限らず、むしろ、信徒ひとりひとりもまた伝道者です。酒井さんが伝道についてよくおっしゃっていたことで、今も印象に残っている言葉があります。それは、信徒の役割は、隣人と教会や牧師をつなげる電柱を立て、電線を引く役割だ、というのです。「牧師のところまで連れてくるのがわたしたち信徒の役割です。牧師がその人に本当に生きた本物の御言葉を語って、聖霊という電気を流してください。先生、頼みましたよ。」この言葉を聞いて、御言葉を取りつぐものの責任の重さに思わず身震いしたものです。

伝道とは信徒が直接になうことです。そしてそのような信徒を生み出し、育てるのが牧師と教会の働きです。

「為ん方つくれども希望を失わず」

次に、伝道者の家庭について、一言申し上げます。

わが家では、特別に大切にしている聖句があります。それは、コリントの信徒への手紙二、四章八節です。「途方に暮れても失望せず」ですが、ここは文語訳では、「為ん方尽れども希望を失わず」となっていました。為すべがなくなっても、希望は失わない、ということです。希望と書いて、「のぞみ」と読ませていました。本の中からだったと思いますが、妻が、この言葉をいつしか、口に出すようになり、二人で、ことあるごとに、「為ん方つくれども希望を失わず」「為ん方」「為ん方」と合言葉のようになっていました。実は、妻は、学生時代にうつ病で苦労したのですが、その後は回復して元気になっていました。しかし、開拓伝道の牧師館に住むようになって、再発してしまいました。特に子どもの出産と重なって、ひどくなっていました。

四国で四年目か五年目の頃でしたが、病気も重くなって、わたしはなんとか日曜日の勤めだけは果たしていましたが、それ以外はすべてお休みしたり、キャンセルしたりするなどが続いていました。もうこれ以上は無理だと判断し、四国を離れ、わたしは休職し、妻は療養に専念する必要があると思い、二人で祈って決断して、教会にもそのことをお話しする段階になっていました。そんな折に、旧知の友が遊びにきて、おいしい魚を食べさせてくれというので、かつおのたたきなどでもてなしました。夫婦の深刻な話は、その時点

で、口にすることもできません。とりとめのない会話を楽しみ、その友人夫妻は帰っていかれました。たったそれだけのことだったのですが、しかしそのとき、わたしたち夫婦はそれぞれ、そこで新しいことを神様から示されました。遊びに来てくださった方は、堀俊明牧師と真知子夫人です（今は真知子夫人も教職となっています。高知分区にある瀬戸キリスト伝道所で真知子夫人が主任担任教師となられ、俊明先生は今年度隠退教師となられました）。堀先生は、そううつ病に加えてアルコール中毒に苦しむ中で、キリストに捕らえられ、教職として召された方です。そううつ病は現在薬で相当コントロールできるようになっていますが、アルコール中毒というのは一生直らない、と堀先生はおっしゃっていました。

「わたしはそううつでアル中の堀です」と公言され、牧会のかたわら、病に苦しむ方々の自助グループを主宰されて、今もよいお働きをしておられます。その堀夫妻の、明るく屈託のない笑顔とおしゃべりに接して、わたしたちの心に何かの変化がおきました。「主は生きておられる。弱いものをその弱いままに、お用いになられる。」後からわかりましたが、わたしたち夫妻が苦境に陥っていることを牧師仲間たちから聞いて、心配して来てくださったのだそうです。でも、そういうことはおくびにも出さず、また、何か説得した

り、励ましたりなさるといいうのではなく、まったく自然体で、楽しいおしゃべりだけして帰られたのです。ですから、わたしたちは言葉としてではなく、堀先生ご夫妻の存在を通して、主の言葉を聴いたのです。弱いままで、主はお用いくださる、と。主はきっと新しいことを見せてくださる。その希望にかけてみよう、という思いが与えられました。そして、留まる決心をしました。実際に、その先に、新しいことを見せていただいたのです。こんな弱いわたしたちであったにもかかわらず、伝道所は成長し、会堂建築を果たし、返済も終えて安定した歩みとなったのです。

もうひとつ、わが家の長男は不登校で、小学校三年から中学時代まで、それで苦しみました。このこともわが家にとっては大きな十字架でしたが、このときも、「為ん方つくれども希望を失わず」です。復活の主は生きておられます。主がこのことを通しても、道を拓かれるのを待とう。そういう信仰へと導かれました。そして本当に、主は道を拓いてくださいました。不登校を通して、知り合いとなる親たち仲間たちが次第に増えていきました。また、このことがきっかけではじまった、文庫活動によって、地域の子どもたちが、いつも教会にあふれるようになりました。居場所のないこどもたちが、日常的に教会に入りするようになりました。急ぐばかりが人生ではない、回り道もまた大切なことだ、と

示されました。

弱さがあったからこそ、立ち止まり、回り道をしたからこそ、豊かな祝福があらわれてきました。

結局、四国での伝道は、妻と子どもたちによって大いに助けられて進展しました。弱さが用いられ、新しいことが起こるのです。

主なる神様はひとりひとりを用いて、時間をかけて御業を進めてくださいます。

第三節 伝道協力と財政的互助の問題

伝道協力について考えるとき、どうしても、財政的な協力も必要となってきます。そこで最後に、この問題についてご一緒に考えてみたいと思います。

霜越先生のこゝろ

初めに、霜越先生のことを一言申し上げます。

わたしがまだ、宿毛に遣わされるずっとずっと以前のことです。第二節の「信徒の働き」で紹介しました酒井登志丸兄が現役の中学教師で、幡多郡大月町の一切といいっさい場所^{いっさい}に赴任していたころのことです。高知教会の牧師であられる霜越四郎牧師が、遠路はるばる一切に住むこのひとりの信徒を訪ねてこられたのです。今も、高知市と大月町は自動車でゆうに三時間はかかる距離です。当時は、海路と陸路との両方を使ったのでしょうか。どれ

だけの時間を要したのでしょう。途方に暮れるような時間です。

大月町一切の小高い丘から夕暮れの輝く海を見下ろしながら、霜越先生は大声で「日暮れて四方はくらく」の讚美歌三九番を歌われ、祈ってくださいと、酒井さんから伺いました。わたし自身は大月町の一切の風景を直接見た事はないのですが、酒井さんから伺ったときに、夕暮れに輝く海を見下ろしながら讚美歌を歌う霜越先生のお姿がまざまざと目に浮かびました。酒井さんは、大変励まされたとおっしゃっていました。

「伝道者スピリット」というのは古風な言い方ですが、一人の信徒を羊飼いのようによこまでも探し求める伝道者スピリットのある、侍のような伝道者に日本の教会は支えられてきたのだと思います。神から遣わされた土地やその教会を愛すべき聖地として、骨をうずめるつもりで一所懸命に教会の開拓と形成に取り組む姿勢、御言葉の勝負師でありつづけること。その伝道者スピリットをわたしたちは忘れてはならないのではないのでしょうか。

(その後、四国から千葉支区に転任してきたとき、不思議な神の導きによって霜越先生のお嬢様、お孫さん、ひ孫さんとお逢いすることがゆるされました。現在も、同じ支区の北総分区でのCSキャンプや千葉支区のJS修養会でご一緒させていただいております。

お孫さんやひ孫さんたちと楽しい交わりをしつつ、直接お会いしていない霜越先生の伝道姿勢のスピリットに思いを馳せている次第です。)

このように、高知教会は高知県全域の伝道を果たす責任と使命を担っているという自覚を持っていました。その伝道姿勢に燃える中で、霜越先生はたったひとりの信徒を訪ねて、はるばる高知県の西端である大月まで訪ねてくださったのだと思います。その後、霜越先生は高知教会を辞任され、土佐嶺南教会を開拓されました。土佐嶺南教会が立っている高知県の浜改田という地域は、典型的な農漁村地域であります。

今ゆくりなく思い出しますと、わたしが四国の宿毛栄光伝道所に赴任する前のいわゆる「お見合い説教」に高知空港に始めて降り立ったとき、当時の土佐嶺南教会の榎本信篤先生と香美教会の山崎祐博先生すけひろが空港にお迎えにきてくださいました。土佐嶺南教会にも立ち寄らせていただきました。どんぶりにどっさりと詰まれた釜揚げちりめんの歓迎にも驚きましたが、その浜改田に立つ教会ののどかな風景にも驚きました(現在は別の場所に移転しています)。言葉は悪いのですが、都会からみればまことにへんぴなところに、霜越先生は本格的な教会を形成すべく、力強く伝道と教会形成を展開されたのであります。先生は『伝道姿勢の教会へ』という小さなパンフレットを遺しておられます。その内容はこ

ここで詳しく紹介することはできませんが、役員会形成にはじまり、祈祷会などの集会の持ち方、そして、財政の考え方など、伝道の姿勢に生きる教会形成のめざすべき要点が述べられています。それは今日でも決して色あせない内容であるといえます。地方の小教会だからと言って、決して手を抜かないで本格的な教会形成を目指す。そこにはその地域と教会に召され、遣わされた気概と誇りが感じられました。遣わされた教会と地域に誇りを持ち、愛をもって全力で取り組む。その意気込み、気迫が伝わってきます。

ついでに申しますと、霜越先生が土佐嶺南を辞して高知から離れた後に、伝道の姿勢に生きる教会形成を継承すべく、同教会に主任教師として迎えられたのは榎本信篤牧師でした。土佐嶺南教会としては、榎本牧師の謝儀を十分には出す事ができない中でお招きすることになりましたが、招く方も招かれる方も、共に信仰の決断をして新しい出発をしました。その際にこの決断を支えたのが、隣の香美教会であり、山崎祐博牧師でした。土佐嶺南教会の前進のために、香美教会が泥をかぶってもよいという決断をし、その協力のもとで、榎本牧師を迎えたのです。着任後、榎本先生は、山崎先生のもとに何でも相談に訪れたと伺っています。特に、説教について山崎先生から指導を受けつつ、神学書の講読も二人ではじめられたそうです。そこからひとつひとつが生まれていったのです。これが、

「香長伝道圏」という大変ユニークで力強い伝道協力体制のはじまりとなりました。

ひとりの伝道者のスピリットが、教会の伝道のスピリットとして点火し、教会間の伝道協力へと展開していくときに、予想をはるかに超えた伝道力が現われます

自立と連帯

さて、これからが本題です。

四国教区の互助制度も、その基本にあるものは、「四国全域への伝道」という伝道のスピリットだと言えます。四国の信徒たちは、かなり前から自立・自給伝道への強い熱意と祈りを持っていました。日本基督教団は戦後、アメリカのミッションボードによる多大な援助を受けて様々な「方式伝道」を展開してきましたが、それをこれからは、できるだけ日本の教会で独立してやろう、そのための財源作りをしよう、と「十億献金」が提唱されましたが（一九六〇年頃）、それを信徒の方が受けて四国に持ち帰りました。特に四国では、経済的な困難から牧師の在任期間が短く、四国伝道の最大の難点でした。そこで、信徒の方々は一日五円祈ってささげようと信仰運動を提唱して、四国中の教会を回って呼び

かけました。それが、今日の四国教区の自立連帯献金となり、四国教区互助制度として確立していったのです。

毎年教会から申請された互助申請を互助審査委員会が審査し、教区常置委員会、四国教区総会で承認されて申請教会の謝儀の援助が行われていきます。それは、権利として最低限を保障されるという種類の「謝儀保障」ではなく、あくまでも一教会の主體的な決断に対する援助であり、本質的には「伝道援助」です。牧師が安定した仕方でも滞りし続け、伝道牧会に携わることこそ伝道で、「四国の伝道は四国のみんなだ」という認識が四国教区では共通理解として与えられています。

四国教区では、信仰運動、献金運動が基盤となっているので、右に述べたような精神を重んじています。それをたえず確認し、信仰運動として常に新鮮なものにしようと、自立連帯推進委員会と互助審査委員会を中心に教区全体で努力がなされています。それが制度としても生き続けている秘訣です。

ところで、「自立と連帯」という時、どうしても熟慮しておく必要がある問題は、援助を受ける側の教会と支える側の教会の姿勢についてです。受ける側は甘えず、卑屈にならずに感謝して受け、自立をめざすと同時に、支える側はおごらず感謝してこの業に参与するという理解がどうしても必要になってきます。

まず、受ける側の教会や伝道所において注意したいことは、受けることに甘えてしまつて、もらえるものは何でももらおうとか、できることならもらいつづけて楽をさせてもらおうということに陥らないで、あくまでも「自立」を目指して成長していくことを祈りながら取り組むことでありましょう。

ところで、受けることで惨めな気持ちになったり、卑屈になったりしないかというところ、これは受けた者でないとわからない難しさがあります。

フィリピの信徒への手紙四章一〇〜二〇節には、有名なパウロの「感謝なき感謝」といわれる事柄が書かれています。パウロは諸教会からの援助を受けず、自分で働いて生活費を稼ぎながら伝道旅行を続けていましたが、フィリピの教会からだけは、例外的に援助を受けていました。そのおかげでコリントでも伝道に専念することができました。上掲の箇所はその援助への感謝を述べているのですが、ありきたりに謝辞を述べているというよりも、「それはあなたがたにとって良かったのだ」、と述べています。自分は更なる贈り物を

当てにしてそういつているのではない、なぜなら、自分は福音によってどんな境遇にも対処できる自由を持っている。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(一四節)、とっています。これは強がりでもなんでもありません。パウロが福音によって得ている自由なのです。だから卑屈になることなく、むしろ、援助してくれたフィリピの教会のために、キリストが祝福をもって彼らの欠けを満たしてくださいように、と祈っています。物質的には不足し、金銭的援助を受けつつ、むしろ、主にある交わりの内に、パウロ自身は「自立」しているのです。

「早く自立するように」と援助を受けている教会は、常にプレッシャーを感じます。いつまでも援助を受けている教会はダメな教会だ、と卑屈になる可能性もあります。しかし、決してそういう意味では卑屈になる必要はないのです。四国教会では、被援助教会も立派に「自立している教会」として、それぞれを認め合う確認を続けています。

四国教会の「自立連帯献金」推進のためのパンフレットにこういう一節があります。「問―自立連帯とはどういうことですか。答え―神様からゆだねられた伝道の使命を各個教会が自覚して立ち、それらの教会が互いに支えあっていくのが『連帯』です。」つまり、神様からゆだねられた伝道の使命を自覚して立つとき、たとえ援助を受けている教会で

あっても、それは「自立した教会」なのです。

カルヴァンは、教会を定義するときに、説教が正しく語られ、聖礼典が正しく行われているならば、たとえ表面的にどんなに不都合や不備なことがそこに満ちていても、それは教会である、と『キリスト教綱要』で述べています。そのとおりだと思います。制度としてまだ整っていない伝道所も、経済的に援助を受けている小規模教会も、説教と聖礼典さえしっかり為されていれば、堂々たる教会なのです。その自覚に立ち、伝道の使命を果たすために教師を招聘し、伝道を展開するならば、それはたとえ援助を受けていても、内容としては立派な自立教会なのです。ですから、四国教会では経済的に独立することを「自立する」とは呼ばないで、たんに「自給教会となる」と呼んでいます。

受けている教会の自由と精神的・信仰的自立のことを確認しました。それはまた、感謝しなくていいとか、経済的にも内容的にも成長し、自立をめざさなくていいということではもちろんありません。宿毛で三年間互助を受けていましたが、よく教会で確認しあっていました。「今は、感謝して大胆に受けさせていだこう。でも、将来は成長させていだこう。わたしたちが支える教会とならせていだこう。」感謝して大胆に受け、感謝しつつその恵みにこたえてせいっぱい成長させていだいだいたのです。

現在、わたしは千葉北総伝道所において伝道協力献金によって支えられていますが、毎週の礼拝の中で感謝の祈りをささげ、また、各教会、個人の方々に、感謝をこめて受領のはがきに牧師と会計が一言添えて送らせていただいています。

支える側の教会のことについては、現在支えられている立場ですから、申し述べにくいことなのですが、かつては支える教会・与える教会としても経験していることですし、また、何よりも聖書から示されることでありますので、あえて語らせていただきます。

与える教会は、自分たちが出しているということでおおごらずに、むしろ、感謝してその業に参与することが大切であると思います。先ほどの四国教区の「自立連帯献金」のパンフレットの冒頭に、こう書いてあります。「問―自連献金とはなんですか。答―自連献金とは、自立連帯献金のことです。四国教区の全ての教会の伝道をすすめていくために設けられた献金です。」

まことに簡潔な文章ですが、ここには、四国の伝道は「四国のすべての教会が四国全域に」という精神が明確に語られています。これは、力のある教会が力のない教会に「してあげる」という関係ではなくて、共に「四国の伝道」という神の御業に参加している、

という意識です。

コリントの信徒への手紙一、八―九章は献金の意義について詳しく記されている有名な箇所です。具体的に問題になっているのは、貧困に悩む母教会たるエルサレム教会を、経済的に援助する異邦人の諸教会が伝道協力するという献金運動でした。使徒パウロは、これをキリスト教会におけるユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の隔ての中垣が取り除かれる「一致」の証しとして、非常に精力的に取り組みました。それは、使徒パウロが命をかけて説いた福音の普遍性と教会の一致の証しでもありました。この献金をコリントの比較的富んだ教会に呼びかけるとき、彼はこういっています。

「他の人々には楽をさせて、あなたがたには苦勞をかけるというのではなく、釣り合いが取れるようにするわけです。あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。『多く集めた者も、余ることはなく、わずかしか集めなかった者も、不足することがなかった』と書いてあるとおりです」(コリントの信徒への手紙一、八章二三―一五節)。

これは何か、困ったときはお互い様で助け合いましょうという世俗の智慧でものをいっているのではないのです。引用した聖句は、主エジプトに際し、荒野で天から降ってきたマ

ナを集めたときの言葉です。家族の多い家も少ない家も、それぞれが力にに応じて集めると、過不足なく満たされた、という故事を背景にしています。つまり、神が配慮して下さっているのです、その神の御業に力に応じて参与する、というのです。キリストの御からだなる教会という「全体教会」に参与するという視点から、献金運動への参与が語られています。

キリストの体の肢体として、体全体に仕えるという意識で頭なるキリストに目が注がれているならば、頭が足に向かって「お前は要らない」とはいわないのです。むしろ、参与させていただくことを感謝するようになるのです。この、「全体教会」という信仰の理解、神の業に参与させていただくという意識があるときに、謙虚さと感謝が生まれます。

現実には、たしかに、受ける者と与える者という意識があり、いわゆるこの世的な金銭の授受の関係からなかなか抜け出せないところがあります。受ける側は受ける側で、いつまでもよくよしたり、もらえるものはもらってやれという考えに陥ったりしがちです。また、与える側も与える側で、上から目線でものを言ったり、要求する視点からなかなか脱却できないでいたりすることがあります。

しかし、この伝道協力の中にある「全体教会」という信仰理解に達し、自立と連帯の精神に生かされるときに、受ける教会はもちろんのことですが、与える教会の方が、むしろ、神の大きな祝福にあずかるのであります。

四国教区の中で互助が開始され、具体的に自立連帯献金として推進されていくときに、中心になってこれを推進した教会は、多分高知教会といえるでしょう。その高知教会の牧師であられる吉田満穂先生（故人）と現在の主任牧師であられる野村和男先生は、自立連帯献金の取り組みについて話されるときは、「うちは力いっぱいさせていただいています。それが本当に感謝してさせていただいています。」と常に謙虚に話されていたのが印象に残ります。

祝福と招き

さきほどのエルサレム教会援助への献金運動について、続けてパウロはいます。「惜しんでわずかしか種を蒔かない者は刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと思いに決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです」（上掲書九章

六〇七節)。また、「種蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてください」(同一〇節)。与えることは幸いなことだ。さらに与えることができるように神が祝福を増し加えてくださる、といっているのです。

与えること、つまり、参与することでどういう祝福となるのでしょうか。それは、まず教会の活性化です。刺激を受け、一教会の喜びは他の教会へと伝播し、影響しあって新しい伝道の幻が与えられます。教会はますます伝道の姿勢に生きる教会として祈りを深め、成長していくことでしょう。一人一人の信徒の信仰が霊的になり、献身の思いが強まり、信徒による伝道が各地で、各方面で起こされていきます。参加する教会の喜びは増し加わっていくのです。

さらに物質的なことも含めて、与える教会はますます祝福されることがはっきりと語られていくのです。「持っている者はさらに与えられて豊かになる」(マタイによる福音書二五章二九節)、と。この喜んで神の伝道の御業に参与するという積極的な姿勢が失われると、教会は内向きの姿勢となってしまふことは、皆様もよくご存じのことと思います。守ることばかりに心が向いてしまうからです。教会が後ろ向きである現状のゆえに、ます

ます内に引っ込むのではなく、むしろ、外に向かって伝道が推進されることを祈る。そうです。その祈りからはじめることが大事なのではないでしょうか。そして、一步でも前進できるように祈り求め、できれば、具体的に参与して力をあわせていくならば、教会は活性化します。聖霊の力を受けて、地の果てに向かって前進する伝道姿勢の教会として成長していくことでしょう。

その後の四国教区互助体制について

その後、四国教区内でも、援助によって小規模教会を支えることが、必ずしもいいことではないのではないか、援助を受け続けることで、その教会は自力で歩むのではなく、結果的にいつまでも足腰が弱くなるのではないかと危惧する声がしばしば起こり、議論されてきたようです。しかし、結果としては、様々な議論があり、経済的な試練もたびたびあったからこそ、四国教区の互助制度は成熟してきたと言っています。互助の歴史が顧みられ、その自立連帯の精神が確認され、その中で、伝道のスピリットも確認されつづけてきたのです。宿毛栄光伝道所がわたしを招聘する頃も、互助を申請する教会が急

増し、全体の会計からは危機感が募りました。しかし、そのとき四国教区の常置委員会は、互助の申請が増えたことを伝道の前進として受け止め、さらなる祈りを求める文章を四国教区諸教会宛てに出しました。わたしは後からその文書を読みましたが、大変感動を受けたのを覚えています。

また、互助を受け続けていた近永教会は、それまでは受け続けているということ、「申し訳ない」という気持ちに満たされていたのですが、そのときの四国教区常置委員会の信仰の決断を知って、自分たちが互助を受けて伝道が続けることが、四国教区全体にとって大きな喜びであると知らされ、その喜びが近永教会の喜びとなって、自立連帯献金を力いっぱいささげるように変っていったことを、近永教会の芦名牧師や当時の会計役員の方からうかがいました。

このたび、折からの世界的不況で再び試練が訪れました。教会の経済的な基盤が弱まり、四国教区互助もまた、ご多分に漏れず、世の流れに従って衰退の道を進むのかと思われました。しかし、実はそうではありませんでした。このことは、わたしが四国教区を離れてからのことですから、間接的に伺ったことですが、経済的には確かに困難は増し加わりましたが、霊的には、四国教区互助はさらに前進しているとのこと。四国を離れた

者から見ると、それは実に目覚ましい前進といえます。なぜなら、互助を受けている教会が存続し続けることを通して、新しい伝道の展開と可能性が起ってきたからです。

具体的には、四国西南地区の関係だけでも、高知分区の須崎教会と互助を受けている愛媛県の近永教会の間で、九〇キロの距離がありますが、その中間にある梶原ゆすはらの開拓伝道が開始されたことを皮切りに、次々と新しい出来事が起こってきたのです。高知県の中村栄光教会が開拓地としている四万十町（旧窪川町）の開拓伝道に、西南地区の諸教会が協力する。その中には、互助を受けている愛媛県の愛南教会、近永教会、伊予長浜教会も参加しているのです。伊予長浜教会から四万十町（旧窪川町）へ、片道約三時間、一五〇キロ近くはあります。東京駅から言えば、北は日光あたり、西に行けば静岡ぐらまでの道のりでしょうか。驚くべきことです。また、高知県の宿毛栄光教会と互助を受けている愛南教会が協力して土佐清水伝道が続けられています。四国西南地区牧師会に牧師を送り出している大洲教会と互助を受けている伊予長浜教会が協力して新谷伝道所の夕拝が開始されています。このように、今や各地で開拓伝道が積極的に行われています。経済的にはどこも困難を抱えつつも、明るく未来を展望して伝道に喜んで取り組んでいる教会・牧師・信徒がいる。それが、四国教区互助の前進している姿です。

点から線へ、線から面へ、伝道の協力は、県境を越え、行政区を越え、新たな可能性を秘めて展開をはじめているのです。そしてこの伝道の喜びは、互助を受けている教会だけでなく、互助を支えているみんなの教会の喜びとなり、新しい希望となるのです。

互助制度によって謝儀の援助を受けているという点、一般にはあまり積極的な響きはしないでしょう。ですが、四国教区の互助はただ小規模教会を援助するという守りから、今や、伝道の攻めへと積極的に転じているのです。

わたし自身は、四国の伝道から大いに学ぶことがゆるされた者ではありますが、これはまた、全教団にとって、そして恐らく、すべての地域にとっても、重要な示唆を含んでいるのではないかと思います。もちろん、四国や高知という一つの地域で成功した例を他の地域にそのまま持っていくても通用はしないでしょう。しかし、内にある信仰や、伝道の精神は、違う形をとってどこでも始めることができますし、また、そうすべきです。聖霊の自由な風が吹くままに。

第二章 千葉での体験から

高知県で十年間共同牧会をしてくださった内田汎牧師は、その後、千葉に転任されました。わたしは、宿毛栄光教会の会堂建築を終え、返済も終了し、いよいよ落ち着いて教会形成や伝道に取り組みつつあるときでした。そんな矢先、二〇〇四年のあるとき、突然内田先生からお電話がありました。千葉ニュータウンの開拓伝道について熱く話され、「君は動くつもりはないか」とお話されたのです。内田先生が赴任された鎌ヶ谷教会で、千葉ニュータウンの開拓伝道することは聞いていましたが、この自分に白羽の矢が立つとはまさか夢にも思っていませんでしたし、まだまだ四国で課題がありましたので、すぐにその電話で断わろうとしますと、内田先生曰く「いや、待ってくれ。最後まで言ってくれな。こちらの資料を送るから良く読んで祈ってくれ、僕も祈るから。」そう言って電話を切られました。内田先生と再びコンビを組んで開拓伝道というのも魅力がなかったわけはありませんが、苦勞してせっかく落ち着くところまでできましたし、家族のこともあります。慎重にならざるを得ないことがたくさんありました。しかし、送られてきた資料に目を通していううちに、これは内田先生の思いだけではなく、長い間、多くの祈りが重ねられたプロジェクトだということがだんだん伝わって参りました。親教会群による開拓伝道、どこかで聞いたことのあることだなあと思ったら、なんのことはない、千葉の親教会

群のモデルは、東京教区西支区だという。資料の中には具体的に、八王子めじろ台伝道所の名前も出ていてありませんか。不思議な神の導きを感じました。そうしているうちに、その送られてきた資料の中にあつたある御言葉にとらわれてしまいました。

「恐れることはない。行ってわたしの兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい。

そこでわたしに会うことになる」(マタイによる福音書二八章一〇節)。

主が先に北総の地で待っておられる。そう響いてきたとたん、その思いにとらわれてしまい、大いに悩むことになります。開拓伝道で苦勞をかけてきた妻になんと言ったらいいのだろうか。ようやく、きれいで、安心して暮らせる牧師館となったのに、「何バカなことを考えているの」と一蹴に附されてしまいそうに思いました。しかし、恐る恐る相談してみると、不思議にも、妻はこの話を受けとめ、一緒に祈ってくれました。

千葉ニュータウンは、北総鉄道沿線の船橋市、白井市、印西市、本埜村、印旛村に渡っている地域の総称で、現在の人口は約十三万人。二〇一〇年に成田空港まで北総鉄道が開通し、鉄道沿線の国道が成田まで延びることになっていて、開発途上にあります。

高層マンション、大型店舗、オフィス街や個人住宅、病院、学校と、次々と整備が進んでいる地域です。ここに日本基督教団の教会がないために、都心や、周辺の地域の教会に

通っている信徒の数も多く、かなり以前から開拓伝道の祈りは起こされていました。具体的には今から約三十年前、一九八一年、鎌ヶ谷教会を開拓された今井万里牧師が次の開拓伝道の祈りを起こされ、準備をされていました。鎌ヶ谷教会を隠退された折、千葉ニュータウンの白井に居を構えて、開拓の拠点とする構想を練っておられました。住宅公団の団地では高齢のおひとり暮らしが許可されず、無念の思いで松山の地に移って行かれました。今井牧師が退任されてから、開拓伝道をめざしていた白井の集会は中断し、はじめられていた白井献金も凍結状態となりました。松山におられた今井先生は、病床につかれていた最晩年、ベッドから起き上がり、「自分はここにはいけない。白井に行って開拓伝道をしなくては」、とおっしゃったそうです。今井牧師は最後まで千葉ニュータウンの開拓伝道を祈り続けられましたが、地上の歩みにおいては実現を見ることはできなかったのです。しかし、その祈りと幻は後に花開くときがやってきます。

初代の今井牧師のあとに、一代置いて三代目の主任担任教師として鎌ヶ谷教会に着任したのが内田汎牧師です。内田先生は、二〇〇〇年鎌ヶ谷教会三十周年記念事業の一つとして一旦棚上げとなっていた白井伝道を千葉ニュータウン開拓伝道として再開しています。その再開は鎌ヶ谷教会総会決議を経て合意に至りました。それ以前に千葉ニュータウンの

中央部分に位置する印西地区に家庭集会が起こされていました。永田萬之助、幸子ご夫妻宅での家庭集会です。ここに集った千葉ニュータウンに住む鎌ヶ谷教会のメンバーが後に千葉北総伝道所の最初の信徒となります。「この地域に教会を」と当初から永田家庭集会で熱い祈りが重ねられて参りました。そしてそれは、鎌ヶ谷教会、更に千葉支区へと波及していきます。二〇〇一年、二〇〇二年に内田先生は千葉支区伝道協議会において、鎌ヶ谷教会で決議された千葉ニュータウンの開拓伝道への熱い思いとその計画を親教会群伝道として発題されました。

先ほども触れましたが、その際にモデルとなったのが、東京教区西支区、現在の西東京教区です。すでに開始されていた親教会群伝道であり、その第五次親教会群として紹介されていたのが八王子めじろ台伝道所であったのです。

さて、この開拓伝道の形については、実は、わたしは招聘の際にずいぶん悩みました。従来はひとつの親教会が子教会を生み出して、責任をもって導くのが開拓伝道であると思っていました。もちろん、牧師や信徒が個人ではじめる形や、教区が先導してはじめる形も知っていました。しかし、この度の親教会群による開拓伝道は、教区主導でもない、全く新しい取り組みでした。その上、西支区の親教会群による開拓伝道と千葉のそれ

とは大きな違いもありました。

有志連合の支援教会グループがひとつの伝道所を共同で生み出して行くという点では共通しています。しかし、八王子めじろ台伝道所の場合は、仙川教会が責任親教会となり、責任を明確化して、他の親教会群がそれに加わって支援していく形となっています。千葉のタイプは、似た点がありますが違ってきます。鎌ヶ谷教会が親教会群を呼びかけた関係教会で、中心的な存在ですが、鎌ヶ谷教会は教会総会で、自分たちは他の親教会と対等の立場で、親教会のひとつでしかないとあえて自己規定をしています。西支区のような責任親教会という位置づけは明確になく、どの親教会も対等の責任で関わるというものでした。この形は前例がないわけではないと内田先生から伺いました。それは高知県の南国教会を生み出した開拓伝道のケースでした。香美教会、土佐嶺南教会、高知教会が対等の関係で後免伝道協力委員会を作り、高知県の東に広がる香長平野の真ん中に教会を生み出す幻を共有し、実際に立派な中堅教会を生み出しました。

それでも、どこが責任をもって開拓伝道をするのか、教会の責任という観点では、多少弱いところがあるかも知れません。何かトラブルが起きたときに、責任の所在が不明確になるという点がウイークポイントでした。しかし、利点としては、開拓伝道に参加し易いということかもしれません。特に千葉の場合、親の立場は対等ではあってもそれぞれの参加の度合い、参加の仕方は任されています。財政的な協力についても、献金ですから全く自由なささげものによります。また個人参加もあります。かなり幅の広い協力体制です。これはひとつの伝道の運動体として考えられた方がよいでしょう。

結局、一応形のうえでは親教会の支えの中での開拓伝道ですが、内実といいたしうか、日本基督教団の教会としての責任の所在ということでは、千葉北総伝道所の主任牧師となる者がその責任者となって開拓伝道を進めていくという形であり、親教会群はそれをサポートする形であることを内田先生との意見交換の中で理解しました。準備期間の不足や、組織としての不明瞭さなど不安材料を感じつつも、祈りの力に押し出されて、出発することになりました。ただし、出発に際し、日本基督教団信仰告白を告白し、その教憲教規を守ることは確認していました。

伝道協力の内実が整うことや成長も、千葉北総伝道所の成長と共に深まっていくことを願って、主なる神にゆだねつつ、わたしは家族と共に千葉に渡っていきました。

話は飛びますが、今年、二〇〇九年十一月にプロテスタントの日本伝道一五〇年記念信

徒大会に、千葉北総伝道所は映像部門で参加いたしました。それは、千葉北総伝道所の開拓伝道の報告だけでなく、この印西市にかつて立っていた大森基督教会について合わせて証しするためでした。

明治一〇年に設立した大森基督教会は、それに先立つ法典教会と共に横浜バンドからはじまったプロテスタント教会の最初の九つの教会のひとつです。また、最初の日本人の牧師三人のうちの一人、戸田忠厚牧師がいた教会です。その戸田忠厚牧師を招いた招聘状が今に残っていますが、おそらく日本人を招いた最古の招聘状であろうといわれています。戸田牧師は、大森教会を起点として、法典教会を兼務し、周辺地域へと馬を駆って開拓伝道に従事していました。法典（船橋市）、大森（印西市）を結ぶ線が木下街道きおろしで、行徳、鎌ヶ谷、白井、大森を経て、利根川へとつながる、江戸と全国を結ぶ重要な陸路でした。この木下街道を使って開拓伝道を展開しようとしたのが、アメリカ長老教会でした。横浜バンドにしても、背後で支えていたアメリカ長老教会にしても、日本全国の開拓伝道の祈りや情熱を込めてこの地域の開拓と教会形成がなされたことでしょう。宣教師グリーンをはじめ、ティソン、その他多くの初代の宣教師や、当時の伝道者がこの地を訪れています。この地はまさにシリアのアンティオキア教会（使徒言行録一三章一節以下参照）のご

とく、祈りと御霊の力が注がれていたのではないかとわたしは想像しているのです。

開拓伝道のスピリット、大森基督教会の歴史を通して、日本の開拓伝道を祈り、願った宣教師たちや、ミッションボード、若き伝道者たちの熱いスピリットが、この土地にはこめられていたようなのです。

残念ながら、この法典、大森の両教会はやがて歴史から姿を消すこととなります。人の流れや社会の仕組みが変わったことに応じて、一旦は終わってしまいます。しかし、神様は今や、百年の時を経て、全く違った角度からこの地に新たな開拓の種をまかれたのです。かつては法典と大森の伝道協力、そして、背後には、一致教会、ミッションボードという伝道協力でした。この度は、親教会群による新たな開拓伝道をチャレンジし、前進しようとしているのです。

二〇一〇年、北総鉄道は成田まで開通し、都心と成田空港まで結ぶ高速線が走るようになっていきます。羽田空港と成田空港とがぐっと近くなります。つまり、かつての木下街道のように、この地域が、世界の玄関口として発展しつつある場所として期待されています。千葉北総伝道所は昨年（二〇〇八年）度に沿線に四九二坪の土地を取得することができました。現在会堂建築を準備中で、二〇一〇年度には建ち上がる予定です。伝道の拠点を

確保して、新たな伝道を展開しようとしています。

開拓伝道を開始して五年。信徒は三〇名、礼拝出席平均も三〇名となっています。これからどんな展開が待っているのでしょうか。課題もたくさんありますが、与えられている恵みと夢は大きいのです。千葉北総伝道所が成長していくだけではないと思います。この開拓伝道と共に豊かな実りがこの地域に、そして関係する諸教会に現されることを期待し、祈り願っています。また、全国の諸教会においても、新たな伝道のチャレンジが始まることを祈り願っています。

地の果てまで福音を！主が先立って歩まれます。主に従って大胆に出発いたしましょう。

付 録

説教Ⅰ 「神の栄光のために」

聖書 コリントの信徒への手紙二、四章七節～一五節

ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています。イエスの命がこの体に現われるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています。死ぬはずのこの身にイエスの命が現われるために。こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。「わたしは信じた。それでわたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知って

います。すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かな恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

最初に使徒パウロは比喻で語ります。土の器とその器に盛られた宝。土の器とは素焼きの陶器のことですね。うわぐすりを塗ったり、絵を描いたりして焼き上がるりっぱな陶器というものをわたしたちは知っていますが、その最初の段階は素焼きの陶器ですね。この段階でよく割れたり、ヒビが入ったりしてしまうのです。そういう見栄えのしないものとか、弱さ、欠け、破れという意味が、「土の器」に込められています。それが自分の姿だということです。そして、その土の器に盛られた宝はイエス・キリストです。その続きに、四方から苦しめられる、途方に暮れる、しいたげられる、打ち倒される、そういう現実があるといっています。パウロは使徒であり、伝道者です。伝道旅行を繰り返して、教会を次々と建てていった人でしたが、それゆえに苦勞も絶えることなくありました。人々からの攻撃にさらされ、迫害を受ける。死ぬような目にも何度もあっています。また、できたばかりの教会に困った問題が起こるとすぐにパウロのところに持ち込まれました。気の休まるどころがありませんでした。

さらにパウロ自身、伝道旅行中に病で倒れたことがあります。それ以来持病のように苦しみ続けたのであります。ですから、ここで言葉だけで苦労しているのではなくて、実際苦しかったり、悲しかったり、つらい目に遭っているのです。そういう自分が土の器であるという部分を包み隠さずここで述べているということは、できそうでないかなできないことでありましょう。そういう弱いところまでさらけ出すというのは勇気がいられます。まあ、そういう部分は恥と見られますね。マイナスの部分として隠す。それがわたしたちが普通取る態度ではないでしょうか。

パウロだって、そんな弱さをさらけ出してばかりいたら、伝道の妨げになるんじゃないかと思うのです。実際、パウロのそういう点を指摘して、「あいつの言うことなんか聞いちゃだめだ」という人々がいたらしいのです。

しかし、パウロは弱さを隠さず、ありのまま語っています。そして、自分が土の器だからこそいいのだとも言っているのです。七節「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものではないことが明らかにするために」、自分が土の器であるからかえって器の内側から支えている力が主であることがわかる、というのです。

弱くていい。弱いからこそいい。まあ、開き直るといいましょうか、逆転の発想がここにあるのです。そして、最後の一五節は、「すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、神に栄光を帰するようになるため」だという。弱いからこそ、神の栄光をたたえることになる。わたしたちが、常識的に「栄光、賛美」と思い描くことは違う。弱さ、破れの中にこそ、賛美の心がある。神の栄光が現われるということが言われているのです。その秘密はどこにあるのか、どうしてそんな逆転の発想になるのか、もう少し御言葉の奥に入って参りましょう。

八〇九節 苦難の現実、弱さがあり、行き詰まりは確かにあるけれど、そのところで、根底から支えられている。守られているという現実を語っています。それは理屈ではなく、実際の歩みとして証しているところです。土の器である自分自身の力ではない。その内側から支えている宝があるからです。

一〇節 「わたしたちはいつもイエスの死をからだにまっています。イエスの命がこの体に現われるために。」ここにパウロを内側から生かす宝、秘訣中の秘訣があります。ここはパウロ自身も言葉にしにくいことを言葉にしているようで、ちょっとわかりにくいところです。ここを直訳するとかういう言葉です。「いつもイエスの死にゆく様をこの身の内に持ち運んでいる。」イエスの死にゆく様、それはイエス・キリストのご生涯のこと

です。

神の子でありながら人間の姿をとって生まれ、自分に罪がないにもかかわらず、すべての人の罪を背負って死なれた。苦難と十字架の死。その死にゆく様をわが身の内に持ち運ぶ。それは、いつも自分が苦しかったり、つらかったり、弱さ、行き詰まりを覚えている時に、主イエスが苦しんで生涯を歩む姿、十字架で苦しんで死なれる姿とひとつに重なって映るということなのでしょう。

イエス様が過去のこと、昔々の話ではなくて、ああ、まさにわたしのために今、血を流してくださっている。今、わたしのために十字架を背負ってくださっている。わたしの重荷と一緒に担ってくださっている。わたしの中で、今、そうやって主イエスとひとつになるということが起こっている。それが弱さの中で起こる。いや、弱いからこそ起こる。そこで慰めがあり、平安がある、ということですね。

そして、「イエスの命がこの体にあられる。」これは将来与えられる復活の命ということよりも、今この時から主の復活の命に生かされている、ということですよ。

この十字架の主、復活の主と一つにされて歩むということ。言葉としては分かりにくいところがありますが、これは実際にキリスト者の歩みの中で受け取らせていただくことなのです。

のです。

わたしとわたしの家族のことを少し証しさせていただきます。

わたしは神学校を卒業してすぐ四国の高知県宿毛市の宿毛栄光伝道所に赴任したのですが、今一九九九年目になります。一九九一年と言っても何か胸を張って言えることではありません。ただ神の憐れみによってなんとか歩みをゆるされてきたとしか言いようのない歩みです。弱さがあり、破れがあり、恥多き歩みでありますけれど、今あえて申し上げるのは、このような土の器だからこそ用いられたということでもあります。主のご栄光を現すためにそのままをさらけ出すのであります。

さて、神学校を卒業して高知県に赴任する際に、教会員のある方と手紙のやりとりをしまして、その時にわたしは次のようなことを述べた記憶があります。

「自分には何も無いけれど、信仰だけはあります。信仰のみを携えて参ります。」

その時のことを思い返しますと、穴があったら入りたくなるような心境になります。「自分は信仰だけはある」と、よくも言えたな、と思うんです。その後の教会生活の中で、家庭において、愛することも、信じるということも実に破れ多い人間だということを思い知らされるんです。牧師がまず、御言葉に聴くということは本当です。まず、自分自身が

愛と信仰の欠如した人間として、福音を必要としているのです。どうしようもない自分のためにこそ、十字架の福音が届くのです。

先日、ある教会員の婦人が、こんな話をされました。その方は教会の隣に市の保育園がありまして、そこに勤務されている時期がありました。その婦人が朝出勤しますと、わたしとよくすれ違ったのだそうです。わたしは毎朝犬と散歩する習慣がありまして、たいていは気づいて挨拶しているのですが、気づかないことも多かったです。わたしが犬を引く横を自動車ですれ違うことが多かったそうです。その時にあることが気になったのだそうです。それは、わたしの顔がとても暗かったということです。その方曰く「地獄の底を歩くようでした。」とおっしゃるのです。わたしとしては、散歩中は空っぽになって、とても気分転換になる時なのですが、その婦人には、なんで牧師なのに、地獄に落ちた者のように歩くのかと違和感があったそうです。牧師なんだからもっと明るく朗らかに散歩したらいいのに、そういう牧師であってほしい。また、そういう教会であってほしい、と思われたそうです。

その当時、その方は教会員でしたが、教会の礼拝からずっと遠ざかっていて、教会の外から教会を眺めていました。その後導かれて、礼拝に戻ってこられました。今では婦人会や文庫活動に積極的に参加されています。その婦人が、暗い顔をして散歩していた牧師の秘密が最近になってわかるようになってきたとおっしゃるのです。そして、そのところに、「自分は今まで暗い現実、どろどろとした現実を見たくない。できるだけそういうところは、見ないように、考えないようにしてきました。でも、教会に通うようになって、そういう問題に悩むようになってきました。教会に来てよけい悩みが深くなってきたかも知れません。でも、今まで避けてきた罪の問題に踏みとどまったり、悩んだりすることを通して、なぜ神の子が十字架に苦しんで死ななくてはならなかったか、少しわかりかけてきました。そして牧師も生の現実に悩むからこそ、わたしたちに深い慰めの言葉が届くのですね。」そう語ってくださいました。

罪の現実、不信仰の現実、愛の欠如、これはわたしたちが本当に見つめたくない、考えたくない、出来たら避けたいと思うことでしょう。でも、その一番暗いところにイエス様の十字架が立っているのです。十字架の主が共に歩んでくださるとは、もうこれ以上底がないというどん底に、主がおられて根底から救ってくださいるのです。この主の十字架の陰にじっと身を寄せるときに、復活の主のみ姿を胸に秘めて、力強く歩み出すことが出来る

のです。

生ける復活の主に支えられる歩み、これもまた本当なのです。いろいろな困難な問題が起こる。試練となる。行き詰まって、もうどうにも身動きが取れなくなる。そういう中で、実際に支えの御手があるのです。教会としても、家族としても、ひとり一人においても、です。現実には押しつぶされてしまいそうところで、復活の主に不思議に支えられるのです。どっこい生きています。どっこい歩み続けているのです。

わが家においては、息子の不登校という試練をここ何年も与えられています。周りの人も心配のあまり声をかけてくださるのです。そして祈ってくださいています。このことも不思議に支えられているというほかないですね。希望をもって待つということ。この待つということは大切です。待つということは、なかなか出来にくいことです。ついあせって動き出してしまふ。しかし、信仰を与えられているので、神様はなんとかしてくださいと希望を持つことができます。八節の「途方に暮れても失望せず」の箇所は、文語訳聖書では、「為ん方つくれども希望を失わず」という言葉でした。希望は「のぞみ」と読ませていました。わが家では特愛のことばです。もうどうにもいかになくなると、何度か口にして支えられてきた御言葉です。もう歩めないというところから、いつも主が支え

てくださって、新しく歩ませてくださる。沈んだ心が、希望に変えられて、顔を上げて新しく歩みはじめるのです。

このように十字架と復活の主が生きておられ、いつも共におられるので、支えられているということが、後から後から分からされて参りました。

わたしたちが強く立派にふるまうからでなく、むしろ土の器だからこそ、内なる宝が輝く。わたしたちの内側だけで輝くのではなく、欠けた所、ひび割れた所から外に向かって、宝は輝き出る。だったら、わたしたちは土の器であるからといって身をひいてしまうのではなく、むしろ、主のご栄光のために、この身を差し出そうではありませんか。主のご栄光のために土の器でいい。ますます土の器でいい。この身を差し出し、主に栄光が帰せられるのを願って新しい一步を踏み出して参りましょう。

(二〇〇四年一月二一日 鎌ヶ谷教会礼拝にて)

説教Ⅱ 「われらのパノラマ」

聖書 申命記三四章一節～九節

モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。主はモーセに言われた。「これがあなたの子孫に与えたとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない。」

主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。主は、モーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない。モーセは死んだとき百二十歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった。イスラエルの人々はモアブの平野で三十日の間、モーセを悼ん

で泣き、モーセのために喪に服して、その期間は終わった。

ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満ちていた。モーセが彼の上に手を置いたからである。イスラエルの人々は彼に聞き従い、主がモーセに命じておいたとおりに行った。

モーセは生涯の最期に、約束の地の大パノラマを眺望することをゆるされ、生涯を閉じることになりました。

「主の僕モーセは、主の命令によって、モアブの地で死んだ。」五節

主の僕として、彼は生き、そして、死んだのであります。それがすべてでありました。モーセは、長い長い旅路の末、生涯の最期は、約束の地に足を踏み入れることができないで、死んでいきました。死に臨むモーセは無念の思いだったのでしょうか。そうではないと思います。彼は、満ち足りて死んだのであります。モーセの墓は、どこにも見当たりませんでした。それはモーセの名が、崇められないためでした。そしてそれは、モーセが望んだことでもありません。自分のしたことが何か業績として残されたり、自分の名が語り継がれることには彼は何も意味を見出しませんでした。モーセの生涯を貫く生きる意味と目的は、主なる神との出会いと召しからくるものです。彼が主なる神に召されたのは、た

だ主のみ業が行われ、主のご栄光が現されること、それに身を低くして応えることだけが、彼にとっての人生のすべての意味であり、目的であったのです。

モーセの最期の場面をごらんください。ここには厳かな絵が広がっています。謙遜で、満ち足りた喜びをもって、約束の地の大パノラマを見入っているモーセの姿。ここには静かな厳肅さが伝わってくるではありませんか。礼拝において与えられる聖なる畏敬と感謝です。ホレブの山で、燃える柴の中から聞こえてくる声の前で、靴を脱ぎ、頭を垂れ、神の燃える真実な愛と出会い、「わたしはある」と啓示された聖なる神との出会いと召しが、ここで重なって映って参ります。

もしここで、モーセが約束の地の大パノラマを見るのでなくて、自分の歩いてきた足跡を見ていたと想像してみましょう。過去の出来事の思い出を自分の業績として誇ってひとつひとつ数えていたとしたら、どうでしょう。今日お読みいただいた場面のような、厳かさとはまるでかけ離れたものとなるでしょう。

また彼が、自分の足元の現実を見て、自分を取り巻く民の現実にはばかり心を奪われていたとしたら、どうでしょう。この場面にあるような、突き抜けた神の祝福とはかけはなれたものとなるでしょう。非常に現実味はあるかもしれませんが、しかし、そこには明るく突

き抜けた希望と力がありません。重く厳しい現実しかないではありません。

愛する兄弟姉妹！モーセがネボ山のピスガの頂に上ることがゆるされたように、わたしたちにも、ピスガの頂きに上ることがゆるされています。わたしたちもネボ山に登りましょう。そこにはわたしたちの前に約束の展望が広がっているのです。

過去を振り返って後悔ばかりしているわたしたちです。そして、自分たちの足元ばかり見て、罪深さや弱さを嘆いてためいきをつくことや、不安におののき途方にくれてばかりいるかもしれません。しかし、実は、そのようなわたしたちが礼拝へと招かれ、イエス・キリストの福音を聞き、聖餐においてイエス・キリストとひとつにされている奥義を確認させていただいているのです。その礼拝の場において、御言葉を聴くときに、実は、モーセのようにピスガの頂の高みに立って、大パノラマの前に立つことがゆるされているのです。

それは、十字架によってゆるされ、祝福された世界です。復活の希望の光にあふれた死のかなたにある天の御国であります。また、神の民として、子孫たちが肅々と継承していく神の国の大事業でもあります。またそれは、地の果てに至るまで広がっている伝道地であり、約束された土地なのであります。

本日、この後で、プロテスタント伝道一五〇年記念信徒大会が、東京の山手教会で開催される予定です。わたしたちの伝道所からも数名参加します。それは、わたしたちの伝道所が、「地域の宣教の歴史の素顔」という映像部門で、参加することになっているからです。本日の参加人数の目標は八五〇人とうかがっています。わたしたちにとってはある意味晴れがましく、またある意味身の程知らずとも思えます。そのような会に参加するきっかけとなったのは、実は、毎週の祈り会でありました。そこで、今、詩編を学んでいるのですが、その中で、シオンという言葉が出てまいりました。詩編八四編、八七編などのシオンの詩編を学んでいたときです。主なる神様がシオンの山、すなわち、エルサレムを中心に統治される。それは実は、神の民だけのことではなくて、すべての国まで及ぶ広がりや影響力を持つということが証しされています。そのシオンの山はどこか。そのことを祈り会に集う兄弟と共に思い巡らしているうちに、わたしたちにある啓示のようなものが与えられました。五〇〇坪近い土地を与えられ、教会がこれから建築されようとしている土地。ここには、わたしたちが理解していることよりもっとおおきな意味が隠されているのではないか、ということ。一五〇年前にプロテスタント伝道が開始されたとき、その第一源流の横浜バンドが、この印西の地に開拓伝道を展開して大森基督教会が建てられました。その後、大森基督教会に日本のプロテスタント教会の最初の三人の牧師の一人、戸田忠厚牧師が初代牧師として着任されました。戸田牧師はここから、馬を駆って各地に伝道を展開していったのです。この地は、「印西牧」といって、江戸時代は幕府の馬を生育していたそうです。馬にまつわる話もたくさんあります。横浜バンドとその背後にあったアメリカの教会からすれば、日本の伝道の重要な拠点として、この大森教会が位置づけられ、祈られ、たくさんの人や援助が送られてきたと思われまます。そういうことが次第にわかってきました。来年、この大地を横断する北総鉄道が成田まで開通しようとしています。その年にあわせるように、会堂建築も果たし終え、開拓伝道をさらに大きく展開していかうとしています。小さなさやかな群れに過ぎないわたしたちひとりひとりの目に、いにしえのモーセが仰いだ、シオンの山の高み、ピスガの頂の高みが重なるのです。

わたしたちは現在、毎週ホテルで午後の礼拝を守り、いろいろな困難にぶつかって、必ずしも意気揚々とした歩みをしているわけではありません。いやそれどころか、開拓途上にあつて困難の窮みの中で息も絶え絶えに、「なんとかかんとか」歩んでいる小さな群れであるという現実かもしれません。しかし、ここが実は、シオンの山だったのです。ここ

が、ネボ山だったのです。

富士山の裾野は、登れば登るほど広がっていくように見えるといいますが、まさにわたしたちも、今までは、小さく見えていた裾野が、ぐんぐん広がってきている。地の果てまで福音を！その地平は、ここからかぎりなく広がっているではありませんか。アブラハムがロトと別れた後で、約束の地を見渡す場面があります。「さあ、目をあげて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。」(創世記一三章一四節)、「さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」(一七節)

日本の伝道のために宣教師たちが海を渡り、先達の開拓伝道者たちが、熱い思いで下駄履きで、また馬を駆って、ひとりの信徒を捜し求めて遠い地を旅したように、先立つ主が歩きはじめているのです。今も主は地の果てに向かって先を歩まれているのです。その日本伝道の大パノラマが、自分たちの置かれている場所から、教会の礼拝から見る事がゆるされていく！主と父祖たち、また先達者たちと同じまぼろしを見る事がゆるされていく！なんとすばらしいことでしょうか。また、なんと光栄なことでしょうか。身の震えるような畏れと感謝を覚えます。

その伝道の展望が開けているところで、小さなわたしたちが、しもべとして召されているのであります。この大きな展望の中で、小さな小さなわたしたちの持ち場、役割、使命が見えてくるのではないのでしょうか。わたしたちは、おごり高ぶることなく、ただ主のしもべとして、その壮大なご計画の一旦を担うように召されています。

九節に、後継者ヨシュアのこと記されています。モーセから手を置かれて、彼は霊の力を受けていました。ここに働きを担う秘訣が示されています。モーセもヨシュアも人間的な魅力や力によって使命を果たしていったのでは決してなかったのです。その力は上から、神の知恵と力によって与えられ、働きを担っていくのです。

伝道は神の御業であります。教会は聖霊と御言葉の力により頼むことによって伝道の深い河や厚い城壁を突破し、前進していくのです。わたしたちは決してそこから右にも左にもそれないでいよう。ここからわたしたちも共に雄々しく前に進んで参りましょう。約束と勝利を信じて。

(二〇〇九年一月二二日 千葉北総伝道所のホテル礼拝にて)

著者によるあとがき

献身を志して約三〇年余り、自他共に認めるもろい土の器に過ぎない者が、神さまのみゆるしと慈しみによってヨタヨタと歩まされて参りました。

過去を振り返れば、悔いと恥ばかりの歩みですが、無我夢中で手探りのうちに進まされた道のりをたどる機会が思いもかけず与えられました。その軌跡をひとつひとつたどるとで、現在只中にある開拓伝道の途上に一筋の希望の光が差し込んできたように感じています。それにより、何度転んでもなお起き上がる力を与えられて、一步を踏み出す日々です。

最初に赴任した四国の地で、右も左も分からないわたしと共に祈り、学び、支え合うことのできた同労者の方々、先輩方、信徒の皆様のお支え、お導きがなかったら、牧師としての歩みを果たして続けられていたかどうか定かではありません。ことに、内田汎先生には格別のご指導を頂きました。若いだけの世間知らずの者であったわたしは、すべて内田

先生を真似ることからはじめました。今も近い所において、自分にとって牧師、伝道者としての模範となってくださっています。また、開拓伝道の家族の痛みにご配慮くださり、常に陽だまりのような温かさで支えてくださった小島誠志先生ご夫妻、伝道の生きた学びをさせていただいた榎本信篤先生、山崎祐博先生。四国西南地区で最初から苦勞と喜びを共にさせていただいた芦名弘道先生、黒田若雄先生、矢野敬太先生。そして、千葉の地で開拓伝道途上の様々な困難を共に歩んでくださった木下宣世先生、中村征一郎先生、岸憲秀先生、眞嶋威先生、長島成幸先生。この場をお借りして、心からの篤い感謝の御礼を申し述べさせていただきます。また、陰になり日向になり、長い苦しい道のりを共に歩んでくれている妻の清子には、言葉では言い尽くし得ない感謝を覚えています。

最後に、主のご栄光と日本の伝道の前進のために祈りつつ、この拙い証しを終えさせていただきます。

二〇一〇年一月一九日

千葉北総伝道所牧師 大串 眞



【著者略歴】

1961年 東京生まれ。

1986年 東京神学大学大学院卒業。

宿毛栄光教会主任牧師を経て、現在千葉北総伝道所主任牧師。

開拓伝道物語

美竹文庫 No.4

発行日 2010年3月20日

著者 大串 眞

発行者 日本基督教団 美竹教会

牧師 上田 光正

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-17-17

TEL 03 (3409) 7401 FAX 03 (3498) 2941

郵便振替 00130-0-573594

URL <http://www.mitake-ch.or.jp>

印刷所 株式会社カワマタ印刷工芸社

〒135-0048 東京都江東区門前仲町1-11-2

TEL. 03 (3643) 1192 FAX. 03 (3643) 1194